

まえ ばやし い せき
前 林 遺 跡

まえ ばやし はい じ あと
(付 前林廃寺跡)

2005年2月

長野県飯田市教育委員会

まえ ばやし い せき
前 林 遺 跡

まえ ばやし はい し あと
(付 前林廃寺跡)

2005年2月

長野県飯田市教育委員会



前林遺跡 遠景



前林遺跡調査区 全景



SB01 全景



同 炉址（主炉址・炉址1・炉址2）



上：SB01
貼床下P1
遺物出土状況

右：同出土管玉



SB03 全景



同 炭化木材・遺物出土状況

序

飯田市は、美しい自然に恵まれ、長い歴史と伝統文化をもつまちとして知られています。

さまざまな文化財があるなかで、地中深く眠る文化財である埋蔵文化財は普段見ることはできませんが、発掘調査を通して私たちの前に姿を表します。一つ一つの発見が蓄積されていき、古代の生活がだんだんとわかってきます。これまでわかってきた古代人の足跡を追ってみると、古代人の生活域と現代人の生活域の多くが重なっていることがわかり、驚くばかりです。人間の営みの継続性を知るとともに、こうしたなかで埋蔵文化財を残すということの難しさを強く感じます。

今回発掘調査を実施した前林遺跡は、以前から古い瓦が出る場所として知られており、寺院の存在が想定されています。調査ではお寺にかかわる建物はみつかりませんでした。さらにそれよりも古い弥生時代の集落があったことがわかりました。遺跡のある段丘の東側斜面は「万寿山公園」と呼ばれ、桜の名所として親しまれていますが、過去にはまったく違った光景がこのあたりにあったのです。

失われていく文化財を記録保存という形で残すことは次善の策ではありますが、こうした記録が地域史を考える材料として有効に活用されることを願うばかりです。

最後になりましたが、発掘調査に際し、多大なるご理解とご協力をいただいた中部電力株式会社及び発掘・整理作業に従事された皆様に、多大なる謝意を申し上げます。

平成17年 2月

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰 啓

例 言

1. 本報告書は送電線鉄塔高上げ工事に先立ち実施された、飯田市竜丘地区桐林所在の埋蔵文化財包蔵地前林遺跡・前林廃寺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は中部電力株式会社からの委託を受けて、飯田市教育委員会が実施した。
3. 当初、前林廃寺跡として委託契約をしたが、調査の結果、寺に直接かかわると考えられる遺構が確認できなかったことから、発掘調査及び整理作業では前林遺跡とした。
4. 前林遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画、Ⅷ-L C 94-2 9-44に位置し（社団法人日本測量協会 1969「国土基本図式 同適用規定」参照）、グリッド規定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託した（本文第3図参照）。なお、座標は旧測地系を用いている。
5. 前林遺跡の発掘調査及び整理作業には、略号KMB1461-21を用いた。また、遺構には次の略号を用いた。竪穴住居址-S B、掘立柱建物址-S T
6. 本書の記載は遺構順とし、遺構ごとに本文・遺構・遺物図・写真図版を掲載した。
7. 土層観察については、小山正忠・竹原秀夫 1996『新版標準土色帖』による。
8. 実測図において、遺構図中のスクリーントーンは炭化物及び焼土の範囲を示し、数字は床面からの深さを示す。石器実測図中の←T→は刃潰しを示す。
9. 遺構写真は発掘調査担当者が撮影し、遺物写真は西大寺フォト 杉本和樹氏に依頼した。
10. 石器・管玉の石材については、飯田市美術博物館の村松武氏に教示いただいた。
11. 本書の執筆・編集は澁谷恵美子・佐々木嘉和が行い、加筆修正・総括を小林正春が行った。
12. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館で保管している。

目 次

巻頭図版

序

例 言

目 次

第Ⅰ章 経 過	1
1. 調査の経過	1
2. 調査組織	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	5
1. 自然環境	5
2. 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査結果	10
1. 遺跡の状況	10
2. 基本層序	10
3. 遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居址 (S B)	12
① S B01 ② S B02 ③ S B03	
(2) 掘立柱建物址 (S T)	28
① S T01	
(3) その他の遺構	28
① 柱列址 1	
(4) 遺構外出土遺物	30
① 土器・石器 ② 瓦	
第Ⅳ章 まとめ	32



前林遺跡を北から望む

第 I 章 経 過

1. 調査の経過

平成15年7月11日付、飯田市吾妻町100番地 中部電力株式会社飯田支店長 高木元明より、飯田市桐林1461-21・22における既存送電線鉄塔の改修に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。計画は既存送電線高上げ工事に伴う鉄塔の建替工事及び工事用資材置き場設置である。

当該地は埋蔵文化財包蔵地前林廃寺跡・前林遺跡にあたる。この一帯はかつて古瓦が表面採集されており、寺院の存在が推定されているところである。平成5年には当該地から北西に150mの位置にある既存鉄塔の改修工事に先立ち発掘調査を実施している。その際に遺構は確認されなかったが、瓦片が出土している。こうした状況から、中部電力株式会社と飯田市教育委員会とで保護協議を行った結果、発掘調査を鉄塔の拡張部分と資材置き場となる部分について行い、記録保存を図ることとなった。

諸協議に基づいて、平成15年8月28日に、中部電力株式会社飯田支店長 高木元明と飯田市長 田中秀典との間で、「飯田市前林廃寺跡（平成15年度）埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

これを受けて、平成15年9月2日より現地における発掘調査を実施した。同日、重機により鉄塔拡張部分及び資材置き場の梅の抜根と表土剥ぎを行い、3日に飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づく測量調査を実施した。4日より作業員を入れて発掘調査を開始した。遺構の確認・掘り下げ・実測・写真撮影を順次行い、10月10日に発掘作業をすべて終了した後、人力による埋め戻しを行い、現地での作業を終了した。その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理を行い、概要報告書を作成した。

平成16年度は、同館において出土遺物の注記・接合復元・実測・写真撮影や遺構・遺物のトレース・版組等の各作業を行い、本報告書を作成した。

なお、発掘作業については、以下に作業日誌(抜粋)を掲載する。

9月1日(月) 現地の状況について確認し、午後重機を搬入。

9月2日(火) 重機による表土剥ぎ。住居址2軒ほか確認。

9月3日(水) 基準点杭設置。発掘器材搬入。

9月4日(木) 作業員による作業開始。S B01検出。

9月5日(金) 耕作による攪乱を先行して掘る。S B01周辺拡張。S B02検出。

9月8日(月) 攪乱掘り下げ。S B01床面を確認しながら掘り下げ。S B02掘り下げ、写真、実測。

9月9日(火) S B01掘り下げ、床面確認。

9月10日(水) 雨天のため作業中止。

9月11日(木) S B01床面検出、覆土断面実測・写真、炉址1実測・写真。

9月12日(金) S B01覆土・周溝・入口施設掘り下げ、炉址1掘り下げ・断面実測。

9月16日(火) S B01覆土・周溝・入口施設掘り下げ、炉址1写真、炉址2写真、主炉址実測。

9月17日(水) S B01主炉址写真、入口施設・炉址2・柱穴断面実測。S B03検出・掘り下げ。

9月18日(木) S B01入口施設掘り下げ・写真、柱穴・主炉址・炉址1・2掘り下げ、全体写真・実測。
 9月19日(金) S B01平面実測、炉址1・2掘り下げ・写真、主炉址断面実測・写真、入口施設掘り下げ。S B03掘り下げ。
 9月22～25日(月～木) 雨天のため作業中止。
 9月26日(金) 鉄塔周辺の遺構検出。攪乱内から瓦片出土。
 9月29日(月) S B01主炉址掘り下げ・実測、炉址2実測。S B03床面炭化物検出。鉄塔周辺検出。
 9月30日(火) 鉄塔周辺掘り下げ。S B01炉址2掘り下げ。S B03炭化物確認。S T01掘り下げ。
 10月1日(水) S B01・S B03・S T01全体写真。S B03炭化物実測。柱列址1掘り下げ。
 10月2日(木) 基本層序確認トレンチ掘り下げ。S B03遺物取り上げ、床面確認。
 10月3日(金) トレンチ掘り下げ。柱列址1写真。S B01主炉址写真・実測、炉址2掘り下げ・写真。S B03周溝掘り下げ、全体写真、遺物写真・実測、炉址掘り下げ。
 10月6日(月) 雨天のため作業中止。
 10月7日(火) S B01主炉址・炉址2写真、貼床掘り下げ。S B03遺物写真・取り上げ。
 10月8日(水) S B01貼床掘り下げ、管玉確認。S B03全体写真・炉址実測。トレンチ実測・写真。
 10月9日(木) 調査区写真。S B01管玉・掘り方写真・実測。S B03炉址写真・実測、貼床掘り下げ。
 10月10日(金) S B01管玉写真・取り上げ。S B03貼床下の写真。調査区埋め戻し。器材撤収。

2. 調査組織

(1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 富田 泰啓					
調査担当者	澁谷恵美子 佐々木嘉和					
調査員	馬場 保之	吉川 金利	(～平成15年度)	伊藤 尚志	(～平成15年10月)	
	羽生 俊郎	(～平成15年度)		下平 博行	(平成16年度～)	
	坂井 勇雄 (平成16年度～)					
発掘作業員	尾曾ちぶき	金井 照子	小林 定雄	下田芙美子	高橋セキ子	
	竹本 常子	橋 千賀子	林 員子	樋本 宣子	松島 譲	
	宮内真理子	吉川 悦子				

(2) 事務局

飯田市教育委員会

尾曾 幹夫 (教育次長)

小林 正春 (生涯学習課長)

吉川 豊 (生涯学習課 文化財保護係長)

馬場 保之 (同 文化財保護係)

澁谷恵美子 (同)

吉川 金利 (同 ～平成15年度)

伊藤 尚志 (同	～平成15年10月)
羽生 俊郎 (同	～平成15年度)
下平 博行 (同	平成16年度～)
坂井 勇雄 (同	平成16年度～)
佐々木行博 (同)



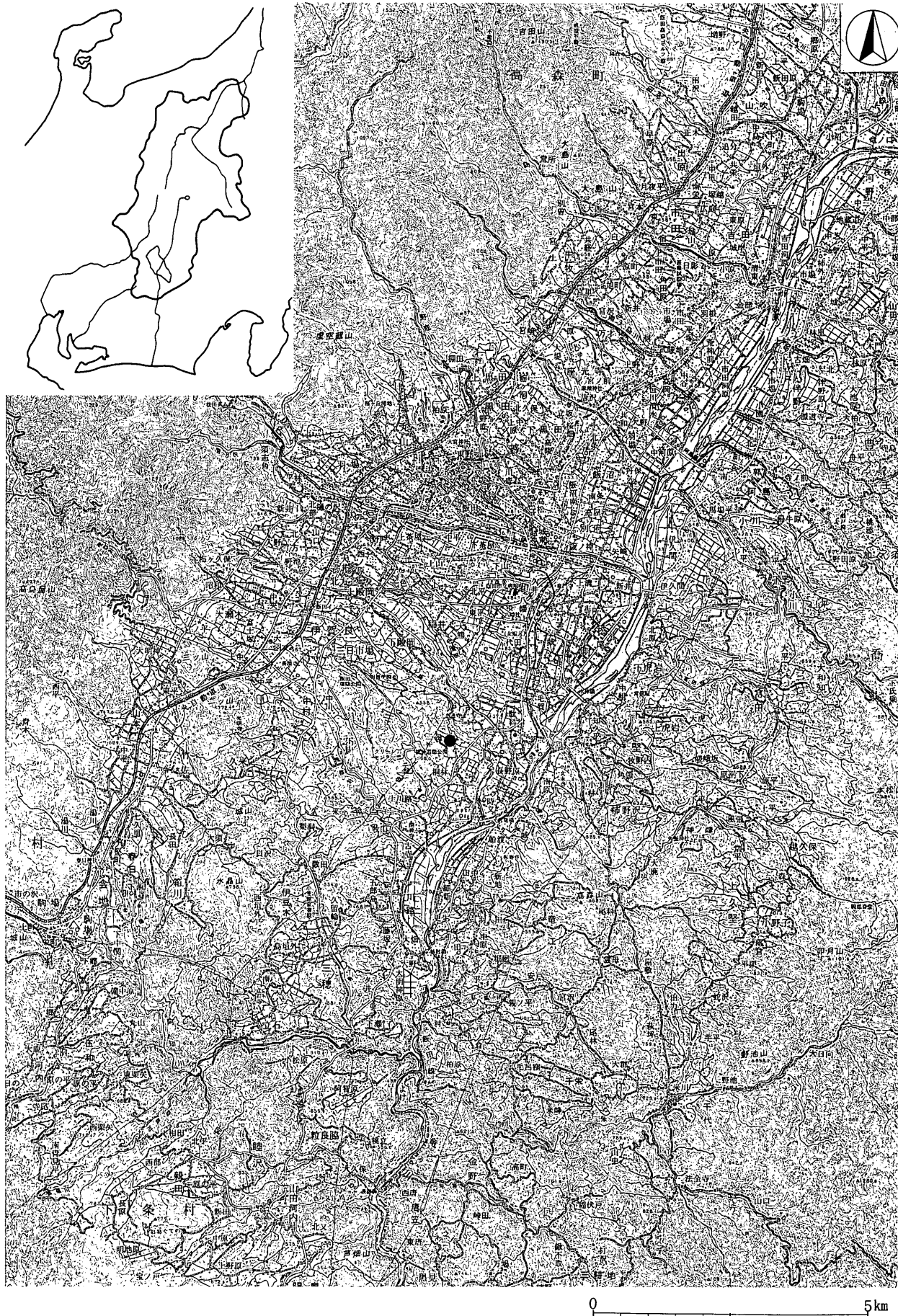
重機作業風景



測量作業風景



発掘調査風景



第1図 前林遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 自然環境 (第1図)

飯田市は長野県の南部を並走する木曾山脈(中央アルプス)と、赤石山脈(南アルプス)の前山である伊那山脈に挟まれた伊那谷の南端、飯田盆地に位置する。伊那谷の中央には天竜川が南流し、国内でも有数の段丘地形を形成している。伊那谷は南北に約100kmと長く、北は諏訪地方・塩尻地方に接する。また南は天竜川伝いに遠州地方に、西は木曾山脈を隔てて三河地方にそれぞれ通じており、飯田市は長野県の南の玄関口といえる場所にある。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属す花崗岩・片麻岩である。一方伊那谷の東、伊那山脈と赤石山脈の間には中央構造線が走っており、三波帯・戸台構造帯・秩父帯・四万十帯が赤石山脈を構成している。この秩父帯・四万十帯から産する硬砂岩・緑色岩・チャート等の堆積岩は、三峰川・小渋川を伝って天竜川河床に分布し、旧石器時代以来、石器の材料として長く利用されている。

伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたことから始まる。伊那谷特有の段丘地形は赤石・木曾両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものである。この段丘は下伊那の地質図(1976)によると、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘Ⅰ・新期扇状地、低位段丘Ⅱの5つに大きく編年されている。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、2月の平均気温は1.4℃、8月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量からみれば年間約1600mm、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少なく太平洋岸式気候に属するといえる。

こうした地理的・気候的条件により、飯田下伊那地方には暖地性から亜高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帯性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。

前林遺跡が所在する竜丘地区は飯田市街地から南に約4～7kmの距離にあり、市全域からみればやや南に位置している。標高では380～560mの間になる。東は天竜川を挟み下久堅・龍江地区に、南は久米川を挟み川路地区に、西は中位段丘から伊賀良地区に、北は毛賀沢川を挟み鼎・松尾地区にそれぞれ接している。天竜川は松尾地区までは広大な氾濫原を形成しているが、竜丘地区駄科から狭くなり、時又付近から再び氾濫原を形成しながら川路地区に至る。地区中央やや西寄りには、南北(松尾から川路へ)に走る断層により、比高差約30～50mの段丘崖があり、これを境に俗に「上段」・「下段」と呼ばれている。地区内はおおよそ5面の段丘から構成される複雑な地形を呈するが、各段丘は毛賀沢川・新川・西沢川・駒沢川・臼井川・久米川といった天竜川の支流に開析され、より複雑な小地形を形成している。竜丘地区の中心は下段に位置するが、天竜川狭窄部で氾濫原がないため、高燥した台地が多い。

前林遺跡は、念通寺断層と呼ばれる断層により形成された比高差約30mの舌状に張り出す段丘上に位置する。ここは東西200m、南北70mの広さで現状は畑と果樹園である。西側はもう一段上がる崖錐で山林となっており、東側は段丘崖で、斜面には桜が植栽されているほかマレットゴルフ場となっている。

この斜面は万寿山公園と呼ばれ市民に親しまれている。また、竜丘地区は桐林を中心として、飯田市指定文化財（天然記念物）に指定されているギフチョウ生息地があり、環境庁の「ふるさといきものの里」に指定されている。

2. 歴史的環境（第2図）

竜丘地区においては、旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていない。遺跡として確認できるのは縄文時代前期になってからである。

縄文時代前期では上の坊遺跡で断片的ながら後葉の土坑や土器・石器が確認されており、天竜川氾濫原から20m程の高所での人々の活動が知られる。中期には城陸遺跡・駄科権現堂（旧宮城）遺跡・前の原遺跡・安宅遺跡・駄科北平遺跡で集落址などが調査されている。城陸遺跡・駄科権現堂（旧宮城）遺跡は、飯田下伊那地方では数少ない貉沢式期～藤内Ⅱ式期を主体とする集落である。在地の土器に加え、中部高地・関東系・東海系・北陸系・関西系の土器が出土しており、当地の地理的条件を物語る。中期後葉では駄科北平遺跡・前の原遺跡で集落址が確認されており、前の原遺跡1号住居址出土土器は東海系が多い。後期初頭の駄科権現堂（旧宮城）遺跡の土坑出土土器もやはり東海系のものである。続く縄文時代後・晩期にかけての資料はほとんどない。

弥生時代においては、飯田下伊那地方では、その複雑な地形により大規模な水稻耕作にはあまり適さないこともあり、前・中期段階の生活痕跡は少なく、小池遺跡で条痕文土器が出土している程度である。遺跡数が増加するのは後期になってからであり、段丘上の高燥地にも集落が形成される。遺跡としては安宅遺跡・開善寺境内遺跡・小池遺跡・ガンドウ洞遺跡・大島遺跡等が挙げられる。墓制としては、後期に方形周溝墓が造られるほか、蒜田遺跡で貼石を持つ周溝墓が調査されており、また同遺跡には方墳の蒜田古墳がある。こうした墳墓形態は古墳時代にも継続することが近年の調査でわかってきている。

古墳時代においては、前期の集落の様相に大きな変化は見られない。中・後期の集落としては、前の原遺跡・安宅遺跡・ガンドウ洞遺跡などわずかな調査例のみであるが、古墳築造の背景として、相当規模の集落が複数あったと考えられる。古墳数は市内で最も多く、前方後円墳9基、帆立貝形古墳3基を含む総数は、消滅も含めて140基余を数える。当地方の中期古墳築造は、当時の政治・経済にとって重要であった馬匹生産にかかわるものであることが近年の発掘調査で明らかとなっているが、竜丘地区はその中でも中核的役割を担っていたことが想定される。この状況は、後期に至っても塚越1号古墳・御猿堂古墳（県史跡）・馬背塚古墳（県史跡）にみられるような横穴式石室を有する前方後円墳の存在からも伺える。横穴式石室の多くは古くより開口し、出土品が不明である中で御猿堂古墳は画文帯四仏四獣鏡（重要文化財）の出土が知られており特筆される。

続く白鳳期には上川路廃寺跡の存在が古瓦出土から推察されている。また、奈良時代から平安時代にかけてのものとしては、古瓦・瓦塔破片を出土した前林廃寺跡、さらに上の坊遺跡で古瓦、宮洞古窯址群から埴仏が出土しており、古墳築造に替わって、新たな権力の象徴として複数の寺院建立がなされたことが想定されるが、これまでに寺院の調査事例はなく、詳細は不明である。

集落遺跡としては、安宅遺跡や前の原遺跡で、これまでに奈良・平安時代の集落址の一画が調査されている。前の原遺跡の場合、時期・性格の把握が困難であったが、9×2間の身舎に3面に庇を持つ総柱建物址と、これに接して2列に並んだ柱列址が検出されている。また、良質な粘土と湧水に恵まれた



1. 大座1・2号古墳 2. 下原1・2号古墳 3. 塚越1号古墳 4. 権現堂1号古墳 5. ツカノコシ古墳
6. 神送塚古墳 7. 丸山古墳 8. 大塚古墳 9. 兼清塚古墳 10. 蒜田古墳 11. 塚原二子塚古墳 12. 内山塚古墳
13. 塚原3号古墳 14. 鏡塚古墳 15. 鎧塚古墳 16. 塚原11号古墳 17. 黄金塚古墳 18. 金山二子塚古墳
19. 馬背塚古墳 20. 御猿堂古墳 21. 久保田1号古墳 22. 駄科北平遺跡 23. 安宅遺跡 24. 城陸遺跡
25. 宮洞古窯址群 26. 前林遺跡・前林廃寺跡 27. 内山遺跡 28. 久保尻遺跡 29. 宮下原遺跡 30. 前の原遺跡
31. 長野原遺跡 32. 小池遺跡 33. 蒜田遺跡 34. 塚原遺跡 35. ガンドウ洞遺跡 36. 開善寺境内遺跡
37. 上川路廃寺跡 38. 殿垣外遺跡

第2図 周辺の遺跡

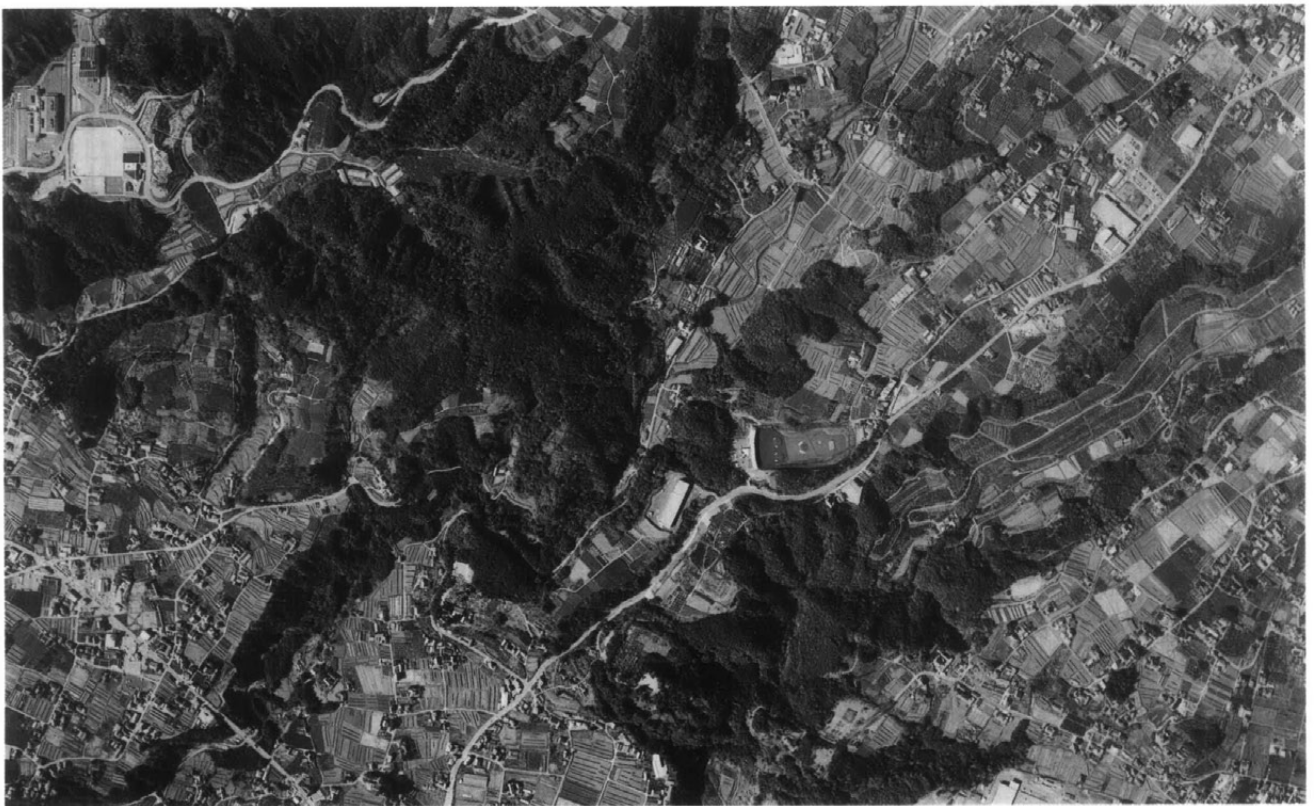
段丘を開析する天竜川の支流に面した地域のなかには、斜面を利用して窯業生産が行われている。竜丘では駒沢川沿いには宮洞・河内ヶ洞といった須恵器生産の窯址群があり、前林遺跡のある段丘南側斜面には堤洞瓦窯址がある。

平安時代の末期～鎌倉時代には、古文書に伊賀良庄の地頭北条江馬氏によって現開善寺の前身開禅寺が開かれている。幾度ももの盛衰を繰り返し現在にいたっているが、室町時代に建てられた山門は重要文化財に指定されている。

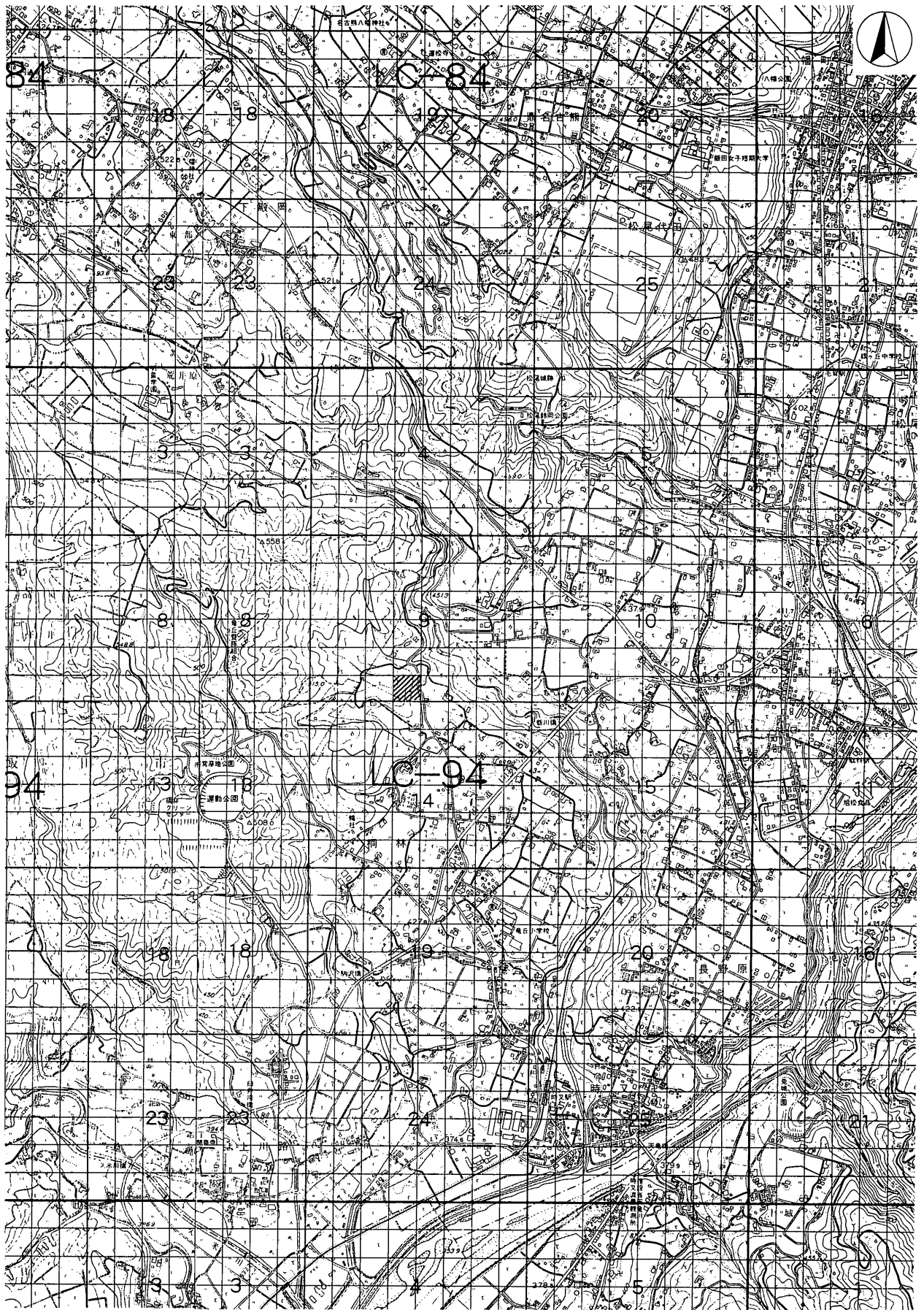
南北朝時代には、駄科の北方で伊賀良地区に近い段丘先端に小笠原氏によって鈴岡城が築城される。毛賀沢川を挟んだ対岸の松尾城とともに小笠原一族の居城であったが、同族の争いにより最終的には深志（松本）小笠原から鈴岡城主が入ったが武田信玄の侵攻で落城し、鈴岡城は廃城となった。武田一族も織田信長に敗れたが、信長も倒れ豊・徳時代に入ると、豊臣系の毛利秀頼が飯田城に入り、伊那全部を領有した。

江戸時代初期には、時又港が天竜川の水運を利用した飯田藩の江戸御廻米の舟出港として栄えており、その他煙草、柿等が青谷（静岡県磐田郡竜山村）などに向け送り出されていた。明治以降、鉄道が開通したことや道路改修が進んで運送馬車が登場して通船は縮小され、竜東や南部山地への物資の運搬等を中心に繁盛したが、明治40年代以降、橋梁が次々と掛けられたり鉄道が延長されたりして、徐々に衰退していった。

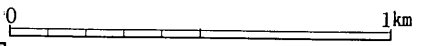
このように飯田下伊那地方は原始より東西の文化の交点として、古代には東国への玄関口として、近世以降は江戸および遠州への道として栄えた土地柄であり、その中でも竜丘地区は、古代から近代にいたるまで飯田下伊那地方の中心地の一つであったといえる。



前林遺跡周辺航空写真



第3図 基準メッシュ調査位置図



第三章 調査結果

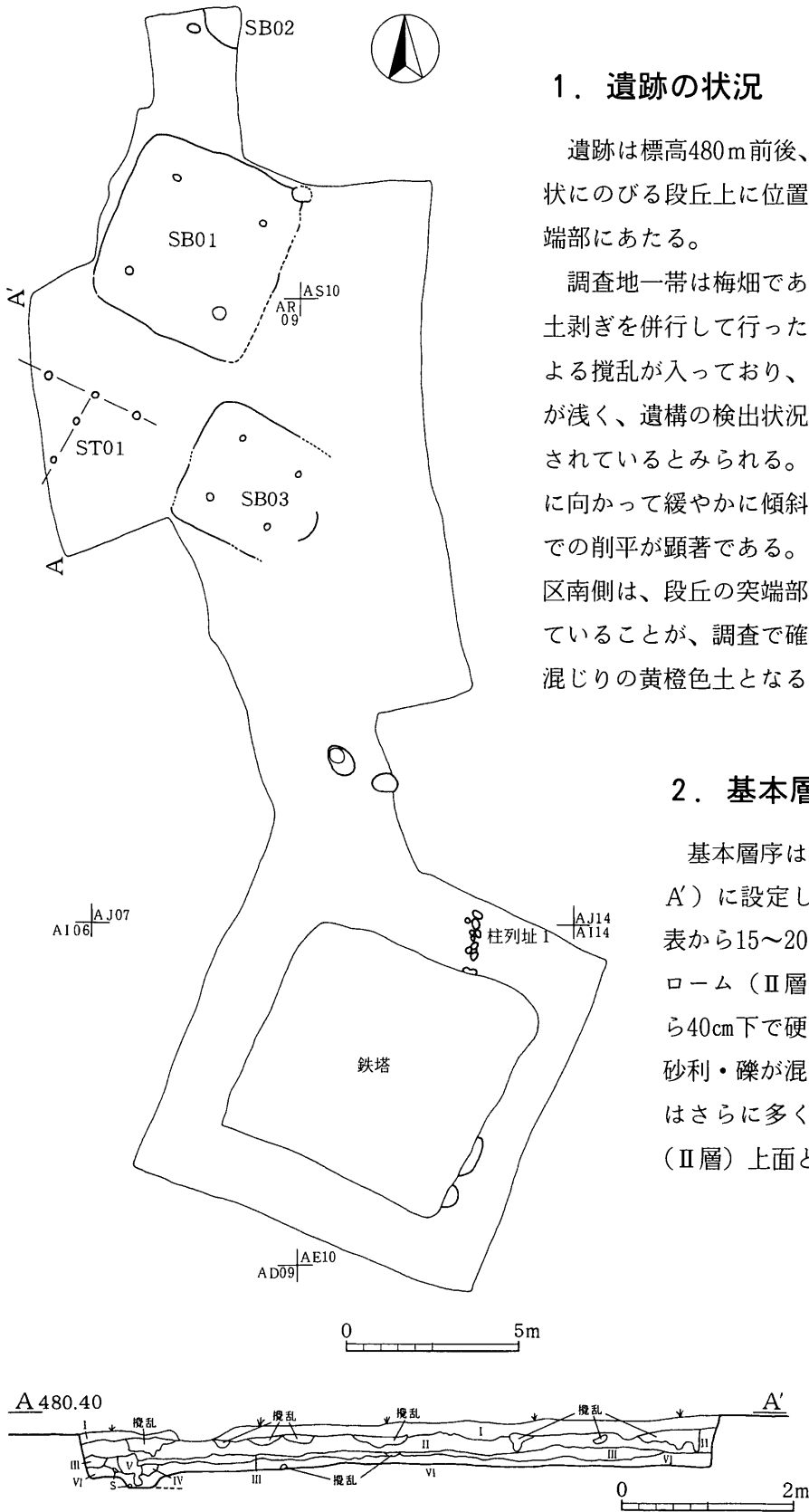
1. 遺跡の状況

遺跡は標高480m前後、下段との比高差約30mの舌状にのびる段丘上に位置する。調査地点はその東側先端部にあたる。

調査地一帯は梅畑であり、重機による梅の抜根と表土剥ぎを併行して行った。調査地点には全体に耕作による攪乱が入っており、遺構確認面となるロームまでが浅く、遺構の検出状況からみてもローム上面は削平されているとみられる。現状では地形は東側の段丘崖に向かって緩やかに傾斜しているが、東側の段丘突端での削平が顕著である。また、既存の鉄塔のある調査区南側は、段丘の突端部で埋め土による造成がなされていることが、調査で確認された。ここでは地山は礫混じりの黄橙色土となる。

2. 基本層序 (第4図)

基本層序は、調査区の東側(第4図A-A')に設定した。堆積状況としては、地表から15~20cmの耕土(I層)下で地山のローム(II層以下)が確認できる。地表から40cm下で硬質なローム(IV層)となり、砂利・礫が混入し始め、70cm(IV層)からはさらに多くなる。遺構確認面はローム(II層)上面となる。



- I 耕土
- II 7.5 Y R 5/8 明褐色土 粘性あり
上面は遺構確認面 以下ローム
- III 7.5 Y R 7/6 橙色土
薄い粘土層を含む
- IV 7.5 Y R 5/4 にぶい褐色土
粘性あり 1cm以下の砂利少量含む
- V 7.5 Y R 7/4 にぶい橙色土
粘性あり 5mm以下の砂利少量含む
- VI 7.5 Y R 5/3 にぶい褐色土
粘性あり 硬質
5cm以下の礫少量含む

第4図 前林遺跡調査区全体図および基本層序



調査区 北側



調査区 南側

3. 遺構と遺物

今回の調査で確認されたのは、弥生時代後期の竪穴住居址3軒と掘立柱建物址および柱列址である。

(1) 竪穴住居址 (SB)

① SB01 (第5～8図・巻頭図版2・3)

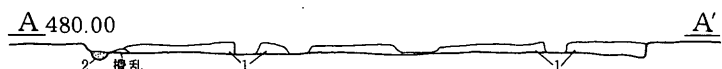
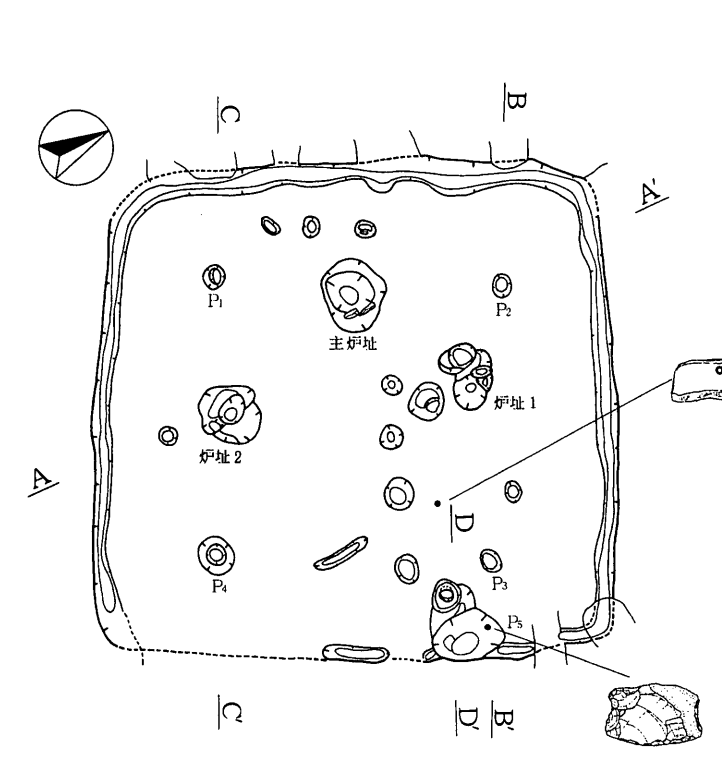
〔遺 構〕

AS・AT08を中心に検出した。上部は削平されており、さらに東西方向に溝状の耕作による攪乱を受けている。現地表が東側に傾斜しているため、東側では壁を確認できなかったが、残存する周溝の一部と柱穴の位置等からほぼ全体を把握することができた。形態は隅丸方形で、規模は東西5.2×南北5.5m、主軸方向はN63°Wである。住居址検出面から床面までの深さは15～24cmで緩やかに立ち上がる。壁の下に幅10～20cm、深さ10cm前後の周溝がめぐり、西隅では周溝の内側が土手状に高くなっている。床面は、ほぼ全体に堅くたたき締められた貼床であるが、東側1/4程度は削られていた。

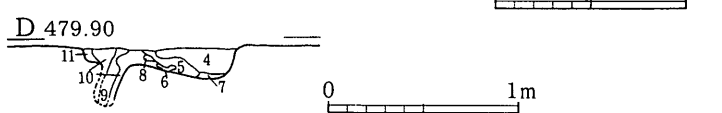
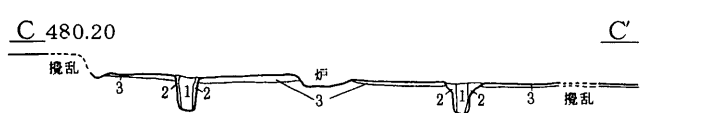
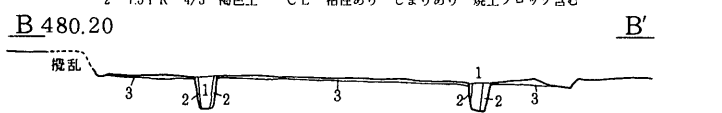
主柱穴は4本(P1～P4)で、心心距離は2.9～3mになる。柱穴の掘り方は、直径20cm程度、床面からの深さはP3が30cm、それ以外は35cmである。柱痕は平面的には確認できなかったが、断面観察により、炭化物の混入する1層が柱痕とすると、径10～15cmとなる。

炉址は、床面で焼土が入った浅い掘り込みを3箇所(主炉址・炉址1・炉址2)確認した。このうち、柱穴P1とP2の間にあるものを炉縁石があることから、主炉址とした。これら3つの炉址は炉内から床面にかけて焼土が広がっており、本址が建替えや拡張がなされていないことから、いずれも本址に伴うものである。しかし、各炉址が同時に使われたものであるか新旧があるかどうかは判断できなかった。

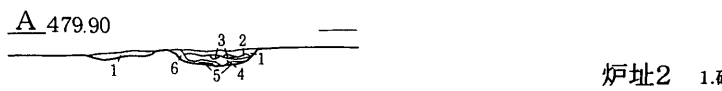
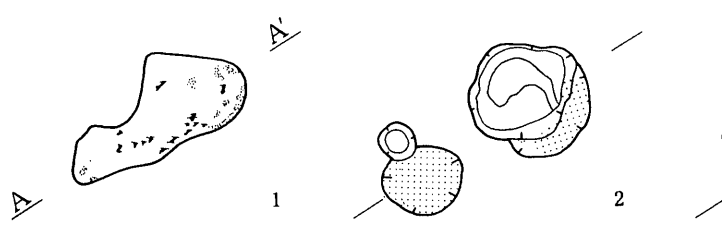
主炉址は、床面での検出時点では焼土・炭化物が炉の西側に45×90×厚さ4cmの範囲に広がっていた。焼土・炭化物層を取り除き、掘り下げたところ、主炉址本体と2つの小ピットを確認した。主炉址の規模は70×75×深さ10cmで、隅丸方形を呈する。炉の東寄りに2つの炉縁石が据えられている。石は7×19×厚さ7cmと5×20×厚さ5cmのもので平坦面を下にして据えられている。底部から炉縁石にかけての炉壁は良く焼けており、炉内には炉縁石の下から底部にかけて焼土が堆積する。主炉址西側の2つの小ピットは北側が径18～23cm、深さ10cmであり、南側が直径20cm、深さ5cmである。炉址1は、床面での検出時点では焼土・炭化物が炉縁周辺と南側に広がり、一部床面も焼けて堅くなっている。上部の焼土・炭化物層を取り除き、掘り下げたところ、炉址1本体と小ピットを確認した。炉址1の規模は58×60×深さ10cmで、不整形を呈する。擂鉢状になっており、覆土中層(3層)に炭化物が堆積し、炭化材も認められる。炉址南側の小ピットは径40cm前後で深さ9cmである。炉址2は、床面での検出時点で焼土・炭化物が50×100cmの範囲に広がっており、上部の焼土・炭化物層を取り除き、掘り下げたところ、炉址2本体と小ピットを確認した。炉址2の規模は60×70×深さ10cmで、隅丸方形を呈する。底部と炉の東側縁部は良く焼けている。底部は平坦である。中層(2・3層)には炭化物・焼土が堆積しているが、焼土等の状況から、炉は1度掘られた後、位置をやや西に移動して再度掘られている状況が確認できる。炉址の南側の小ピットは径40cm前後で深さ6cmである。なお、炉址2の脇から弥生土器(甕)片(第7図1)が出土している。



A-A' 1 7.5YR 3/3 暗褐色土 CL 粘性あり しまりあり 全体に焼土・炭化物含む
 2 7.5YR 4/3 褐色土 CL 粘性あり しまりあり 焼土ブロック含む

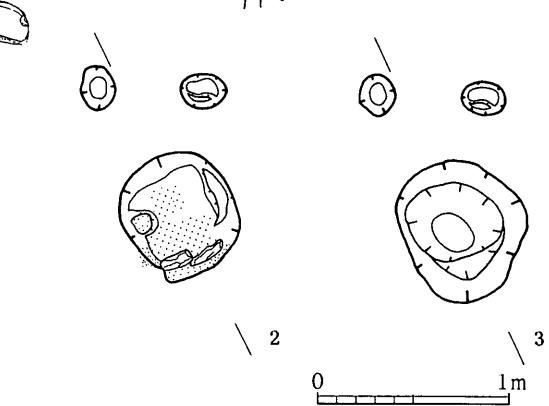
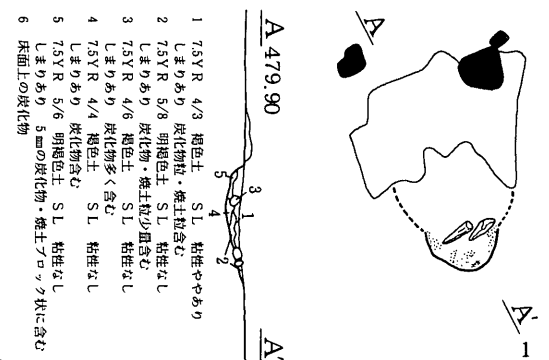


B-B' 1 7.5YR 3/3 暗褐色土 SL 粘性あり しまりあり 1~3mmの炭化物少量含む 柱痕
 2 7.5YR 4/4 褐色土 SL 粘性あり しまりあり
 D-D' 3 貼床
 4 7.5YR 4/3 褐色土 SL 粘性あり しまりあり 1~5mmの炭化物少量含む
 5 7.5YR 3/4 暗褐色土 SL 粘性あり しまりあり 1mmの炭化物少量含む
 6 7.5YR 6/6 橙土 SL 粘性ややあり しまり強い
 7 7.5YR 3/4 暗褐色土 SL 粘性あり しまりあり 1mmの炭化物少量・焼土ブロック含む
 8 7.5YR 7/8 黄褐色土 SL 粘性ややあり しまりあり
 9 7.5YR 4/2 灰褐色土 SL 粘性あり しまりあり 5mmの炭化物少量含む
 10 7.5YR 5/6 明褐色土 SL 粘性ややあり しまりあり
 11 7.5YR 3/2 黒褐色土 SL 粘性あり しまりあり 1mmの炭化物ごく少量含む

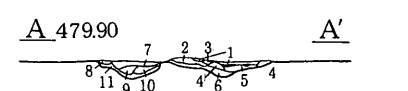
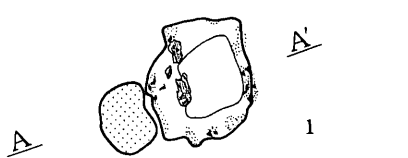


炉址2 1.確認時 2.炉内部 3.掘り上げ時

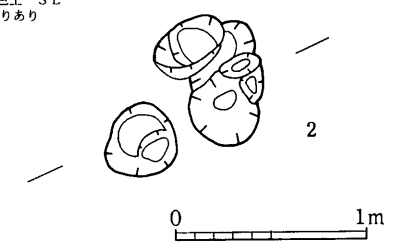
第5図 SB01 (全体・炉址)



主炉址 1.確認時 2.炉内部 3.掘り上げ時



1 7.5YR 3/3 暗褐色土 SL 粘性あり しまりあり 炭化物粒・焼土含む
 2 7.5YR 3/2 黒褐色土 SL 粘性あり しまりあり 炭化物粒少量・焼土粒多く含む
 3 炭化物
 4 焼土
 5 7.5YR 4/4 褐色土 SL 粘性あり しまりあり 炭化物粒・焼土粒多く含む
 6 7.5YR 5/6 明褐色土 SL 粘性あり しまりあり 炭化物粒少量含む
 7 7.5YR 3/3 暗褐色土 SL 粘性あり しまりあり 炭化物粒含む
 8 焼土
 9 7.5YR 3/2 黒褐色土 SL 粘性あり しまりあり 炭化物粒少量・焼土粒多く含む
 10 7.5YR 2/2 黒褐色土 SL 粘性あり しまりあり 炭化物粒少量含む
 11 7.5YR 5/6 明褐色土 SL 粘性ややあり しまりあり



炉址1 1.確認時 2.掘り上げ時

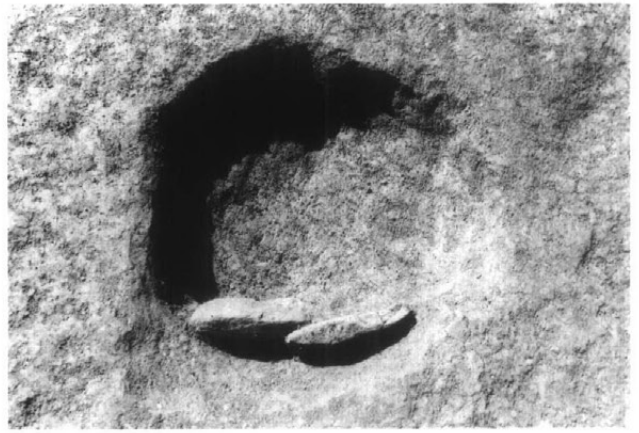
1 7.5YR 4/3 褐色土 SL 粘性あり しまりあり 炭化物粒全体に含む
 2 炭化物
 3 焼土
 4 7.5YR 7/8 黄褐色土 SL 粘性ややあり しまりあり 炭化物粒全体に含む
 5 炭化物
 6 7.5YR 3/3 暗褐色土 SL



S B01 全景



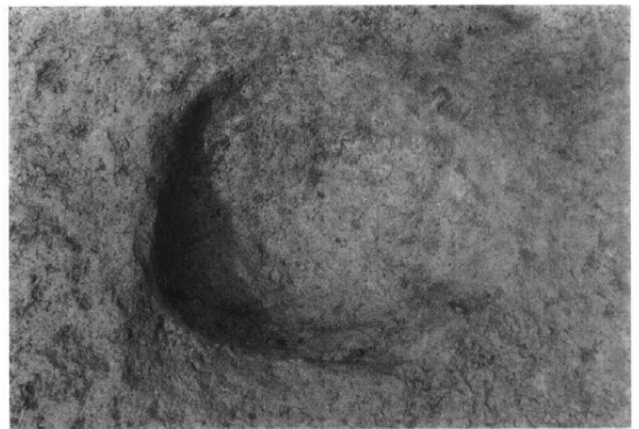
主炉址 (確認時)



同 (炉内部)



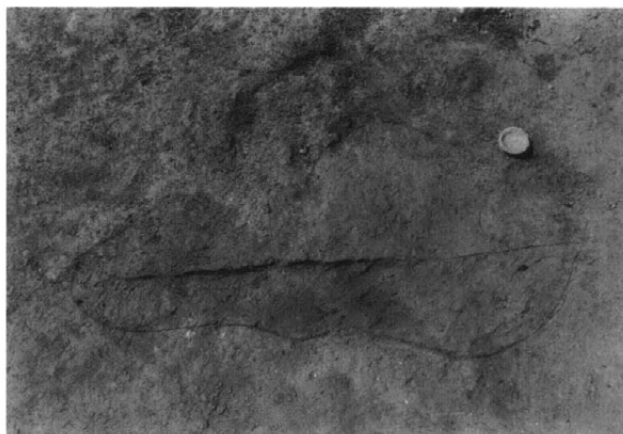
同 (断面)



同 (掘り上げ時)



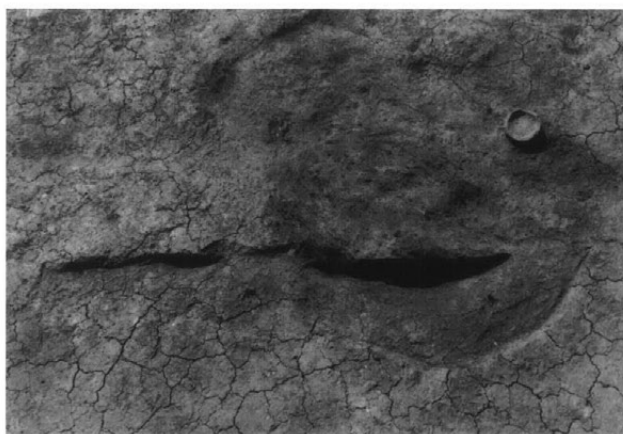
炉址 1 (確認時)



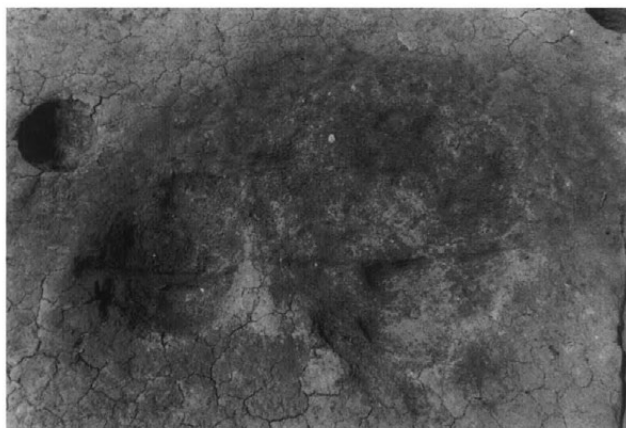
炉址 2 (確認時)



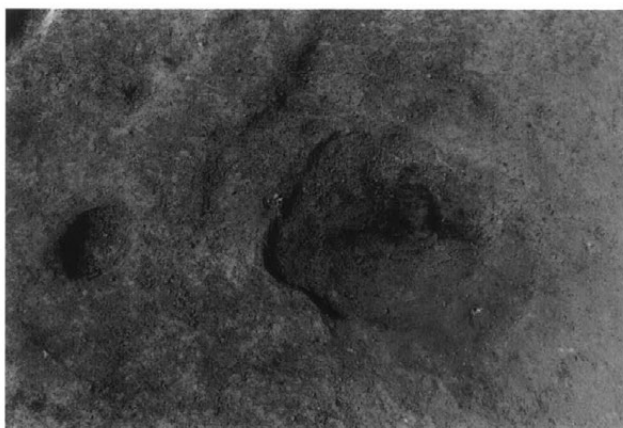
同上 (断面)



同上 (断面)



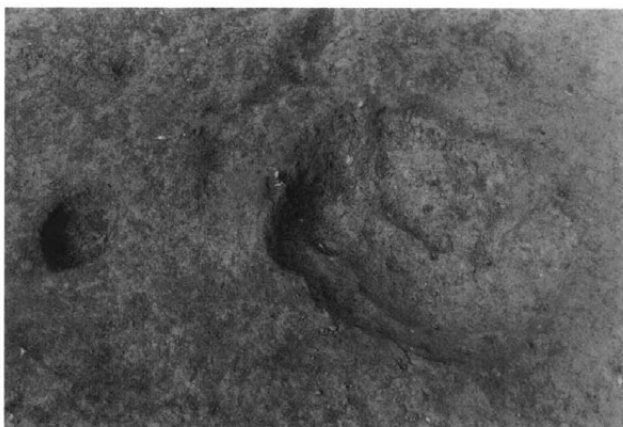
同上 (炉内部)



同上 (炉内部)



同上 (掘り上げ時)



同上 (掘り上げ時)

前述のとおり各炉址の前後関係は判断できなかったが、これらに共通するのは小ピットが伴っているところである。主炉址は西側にピットが2つ、炉址1は南側にピットが1つ、炉址2は南側にピットが1つ伴う。これらピットには、炉本体から広がる焼土・炭化物が入っており、規模も炉本体よりも小さいことから、副炉的な役割を持つものと考えた。

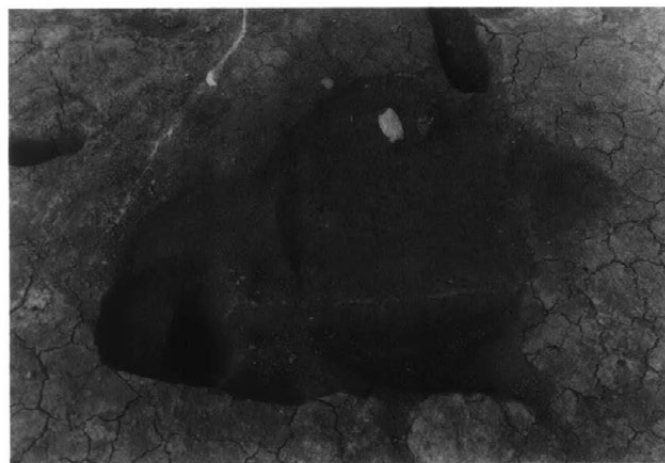
東壁中央やや北寄りに入口施設とみられる掘り込み（P5）がある。規模は主軸方向で77cm、直交する方向で75cmである。床面からの深さは壁際で15cm、内側は10cm程度である。住居址内側に向かって斜めに掘り込まれた部分があり、ここでは深さ30cmになる。覆土中から抉入打製石庖丁が出土している。本址のほぼ中央、主炉址から入口施設までの間に4つの小ピットがある。直径20~30cm、深さ8~13cmで、間仕切り施設の可能性がある。



入口施設・間仕切り施設

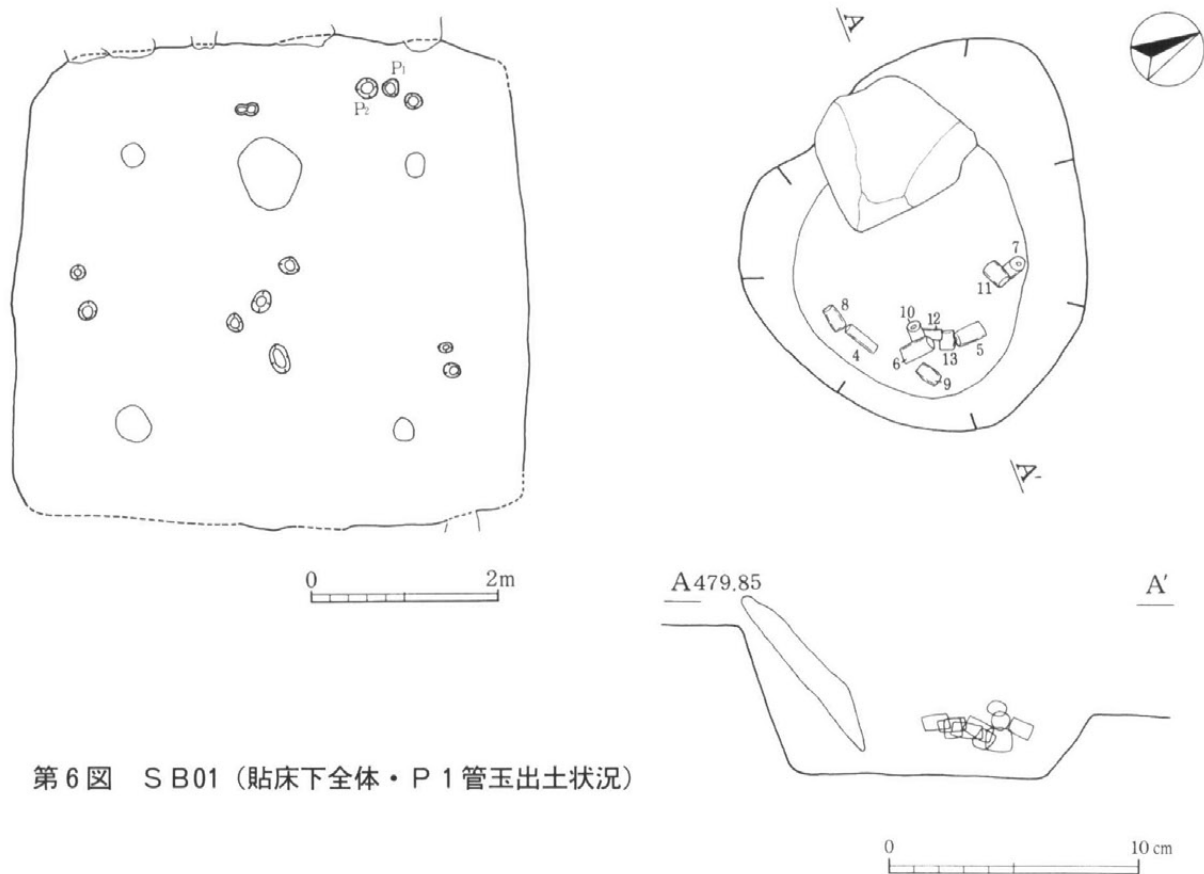


入口施設（断面）



同 遺物出土状況

堅い貼床を剥いだ(第6図)ところ、貼床内には炭化物ほか土器片が含まれていた。床下は平坦であり、小ピット13個を検出した。床下からは弥生土器小片が出土したほか、西側の壁際のP1から管玉10個と横刃型石器が出土した。管玉はピットの東寄りにあり、底部からはやや浮いているが、ほぼ同じレベルで横に並んでいたことから、綴られた状態のものが入れられていた可能性がある。石器は下方が半分欠損していた。本址の建替え等を示すものはなく、重複する遺構も確認できなかったことから、P1を含めた小ピットは本址に付随するもので、管玉等を納めた後、その上に貼床されたものと考えられる。



第6図 S B01 (貼床下全体・P1管玉出土状況)

貼床下P1





貼床下 全景



貼床下P1管玉・石器出土状況

〔遺 物〕

本址覆土からの出土遺物として石器と弥生土器の壺・甕があるが、土器は小破片で図化できるものはわずかである。第7図1は弥生土器の底部で、底部径は6.8cmである。

石器は、同図2の磨製石庖丁で上部に両側穿孔による1孔を有し、両刃である。最大幅7.5cm、長さ3.2cm、厚さ0.4cm。重さ20g。凝灰質泥岩製。同図3は抉入打製石庖丁で両端に抉りが入る。最大幅7.5cm、長さ4.9cm、厚さ0.8cm。重さ48g。凝灰質泥岩製。

貼床下からは弥生土器の小破片と、P1から石器と管玉が出土した。なお、管玉の出土状況図（第6図）と実測図の番号は一致する。第7図4は横刃型石器で半分欠損している。現存長6.7cm、幅7.3cm、厚さ1.7cm。硬砂岩製。第8図は管玉で寸法は右表のとおりである。2・3・6・7・9・10は片側穿孔であるが、それ以外は両側穿孔の可能性はある。材質はいずれも流紋岩とみられる。

番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)	番号	長さ(cm)	径(cm)	重量(g)
1	1.6	0.6	0.87	6	1.1	0.65	0.76
2	1.4	0.6	1.10	7	1.0	0.6	0.36
3	1.3	0.6	0.83	8	0.8	0.6	0.51
4	1.1	0.6	0.61	9	0.8	0.6	0.26
5	1.0	0.6	0.71	10	0.6	0.6	0.35

〔時 期〕

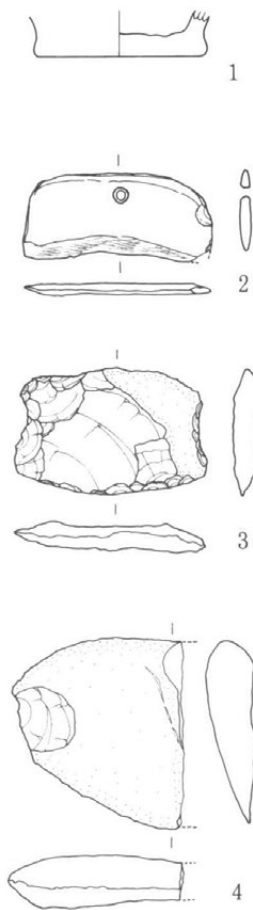
出土遺物から、弥生時代後期（中島期）と考えられる。



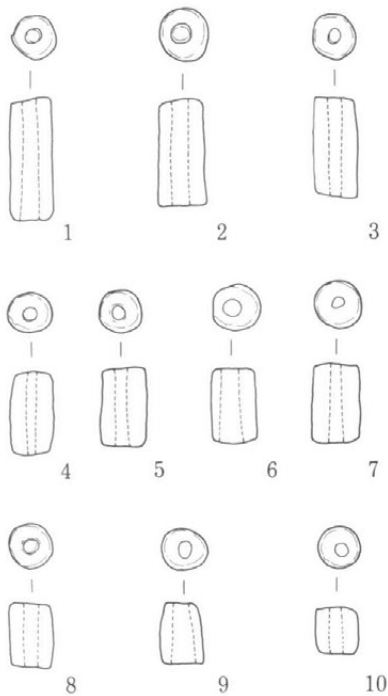
主炉址・炉址1・炉址2



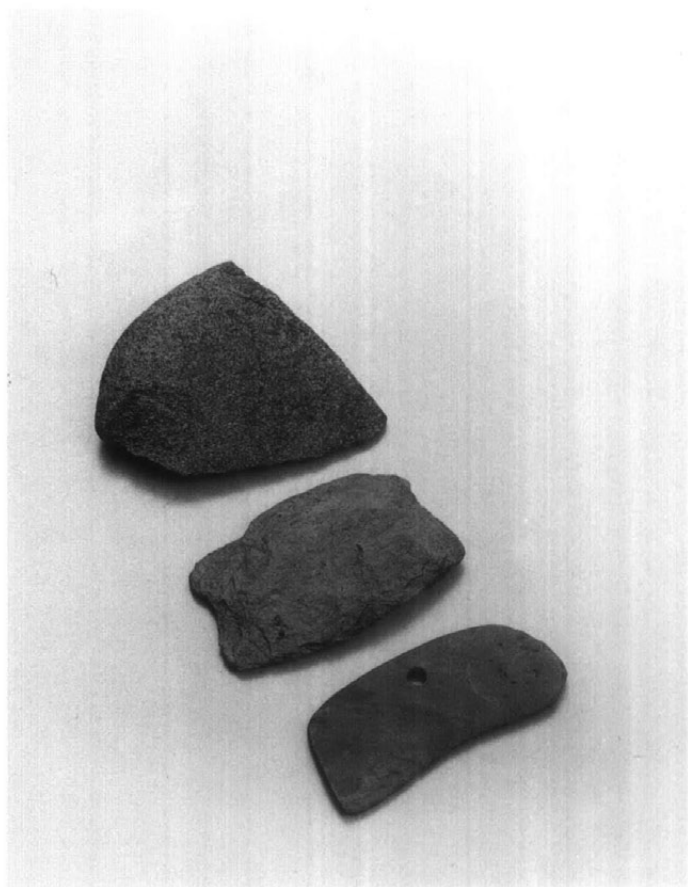
入口施設（掘り上げ時）



第7図 SB01 覆土・
貼床下P1出土土器・石器



第8図 SB01 貼床下P1出土管玉



② SB02 (第9図)

〔遺 構〕

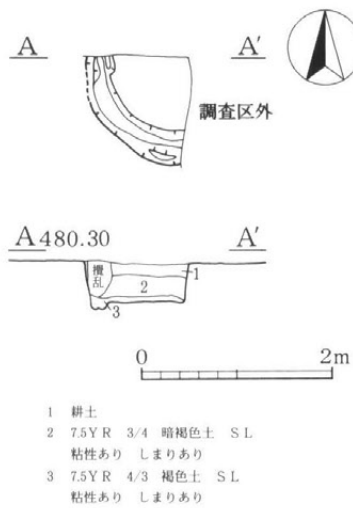
AV・AW08を中心に検出した。ほとんど調査区外となるため、調査で確認できたのは西南隅の一部、面積で1.2㎡程度とわずかである。住居址検出面から床面までの深さは45cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁下に幅20cm、深さ5cmの周溝が巡る。床面は堅くたたき締められている。柱穴等の施設は調査範囲内では確認できず、規模は不明である。

〔遺 物〕

土器が少量出土しているが、図化できるものはない。

〔時 期〕

時期を特定できる遺物の出土はないが、遺構の状況から他の住居址と同時期の弥生時代後期のものと考えられる。



第9図 SB02

SB02 断面



同 全景

③ S B03 (第10～12図・巻頭図版4)

〔遺 構〕

A P09を中心に検出した。S B01と同様、耕作により一部が壊されており、また東側壁は削平されていたが、ほぼ全体を確認することができた。規模は、東側で周溝の一部が確認できたことから、推定で東西4.2×南北3.8m、隅丸方形を呈する。主軸方向はN65° Wである。住居址内には西側の炉址周辺を中心に炭化物の堆積が著しく、炉址・柱穴を覆っていた。西隅から炉址にかけてと支柱穴P 2とP 3の間で炭化木材を検出したが、部位は不明である。このことから、本址は火を受けたものとみられる。この炭化物・焼土の下の床面は堅くたたき締められた貼床である。

支柱穴は4本(P 1～P 4)確認した。心心距離はおおむね1.9～1.95mであるが、P 3とP 4間のみ1.25mと狭い。柱穴の掘り方はいずれも円形で直径13～20cm、P 1・4が床面からの深さが45～50cmで、P 2・3は25～35cmである。断面を図化できなかったが、柱穴覆土には炭化物が含まれていた。

炉址は西側の支柱穴P 1とP 2の間にあり、規模は40×45×深さ16cmの不整形で、炉縁石を持つ。石は30×7×厚さ6cmの石である。炉底には縦に半裁した壺(第12図1)が敷かれていた。壺の下には炭化物、炉縁石の下には焼土が堆積する。炉の南側には55×60cmの範囲に炭・焼土が多量に広がる。

炉址の70cm北側から横倒してつぶれた状態の甕(同図2)が出土した。この甕は支柱穴(P 2)の上であり、本来は柱の脇に置いてあったものが倒れたものとみられる。このほか、炭化物内から有肩扇状形石器(第11図1)が、覆土から横刃型石器(同図2)が、東側周溝内から敲打器(同図3)が出土している。

貼床下(第10図)は平坦で、3つの小ピットを確認した。貼床及び床下のP 1から弥生土器片が出土している。床下の状況はS B01と同様といえる。



S B03 炭化木材・炭化物出土状況



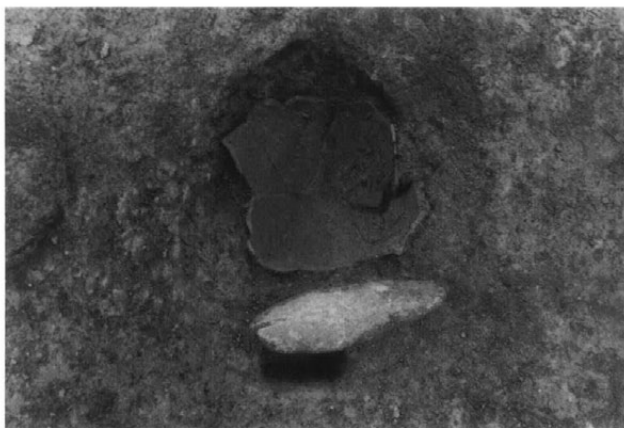
S B03 全景



炉址 (断面)



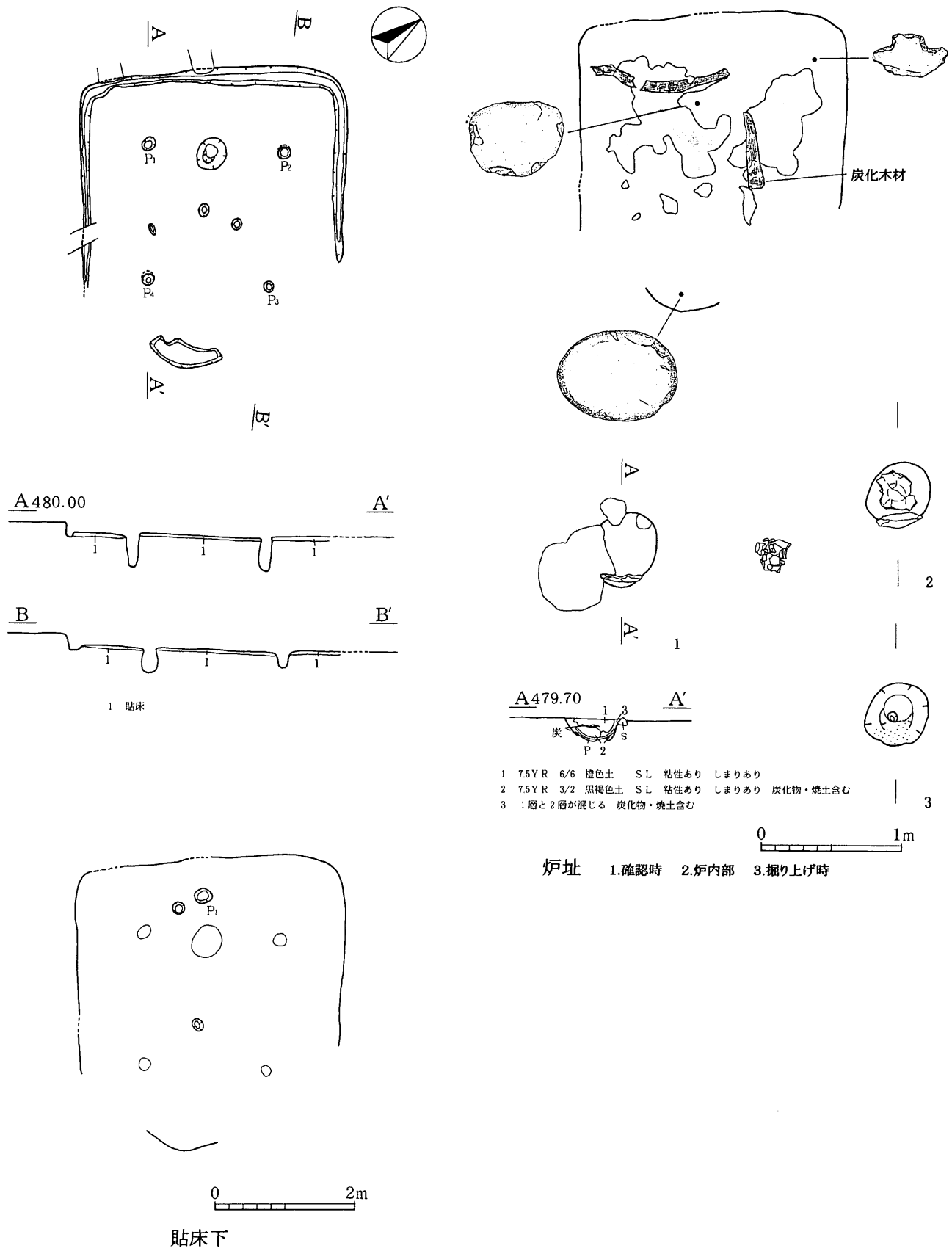
同 (炉内部)



同 (炉内部の壺)



同 (掘り上げ時)



第10図 SB03 (全体・炉址・貼床下)



炉址および遺物出土状況



右：同 掘り上げ後

下：貼床下全景



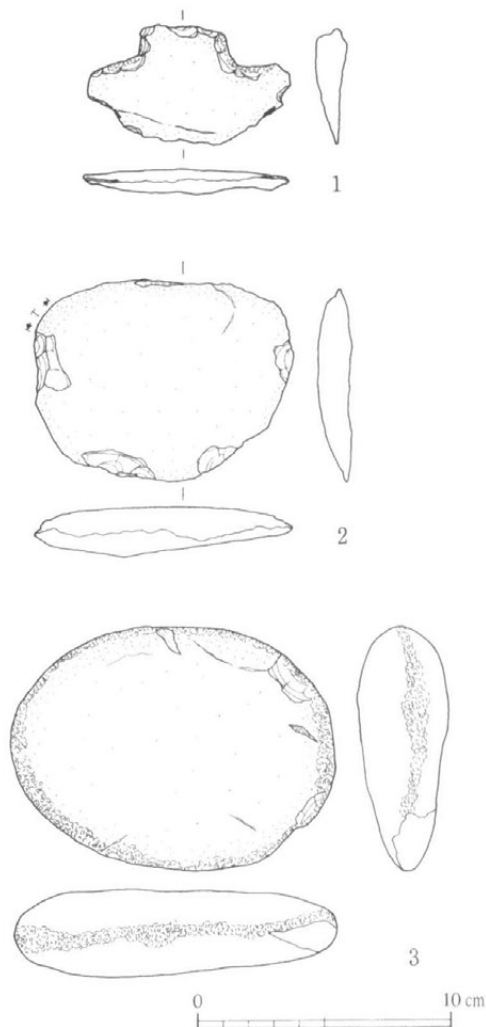
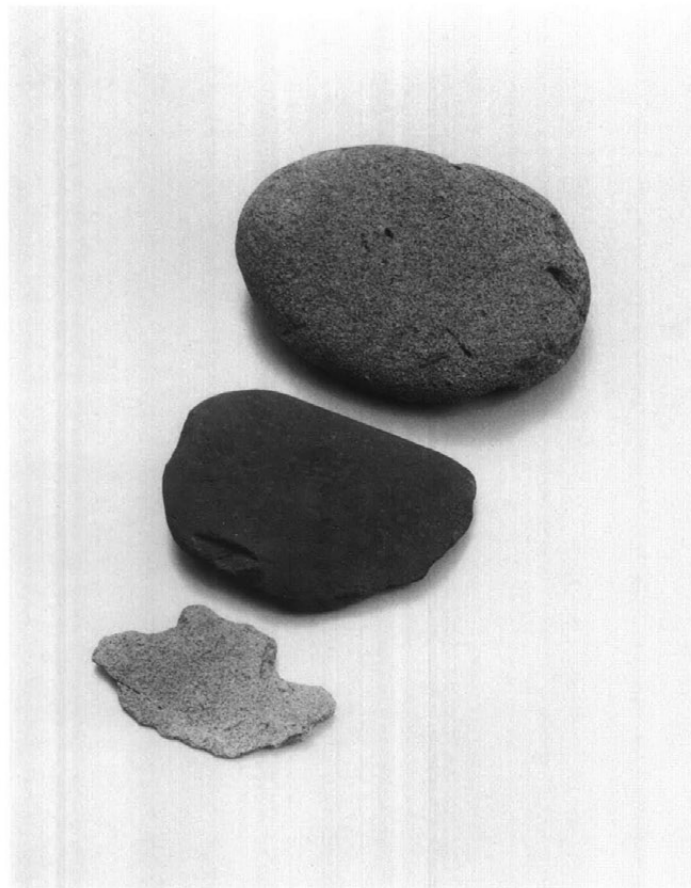
〔遺物〕

土器は、炉内と床面から出土した弥生土器（壺・甕）がある。覆土からも若干の土器片が出土しているが、小破片のため図化できない。第12図1は炉址内の弥生土器（壺）で残存率1/2である。口縁部と頸部は接合しないが推定される器高は35.4cm、口縁部径11.8cm、胴部径28cm、底部径8.9cmである。色調は内外面ともに橙褐色である。胎土に2mm以下の小石粒を少量含み、焼成は良好である。器面が荒れているが、頸部下に櫛描の波状文が施されている。同図2は弥生土器（甕）で残存率2/3である。器高は18.8cm、口縁部径17.4cm、胴部径16cm、底部径6.2cmである。二次調整を受けているため、色調は外面が赤褐色～黄褐色で暗褐色斑があり、内面は暗褐色である。胎土は2mm以下の小石粒を多く含み、焼成は良好である。器面は荒れているが、調整はナデ調整で口縁部下に櫛描の波状文と斜走短線文が施される。同図3は甕の底部で残存率1/4である。推定底部径7cmである。色調は内外面ともに橙褐色で、ナデ調整が施される。胎土に2mm以下の小石粒を少量含み、焼成は良好である。

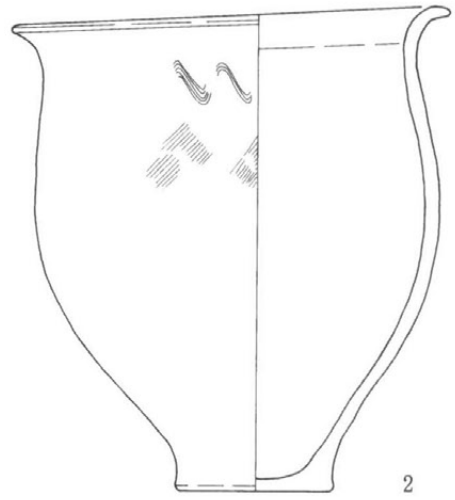
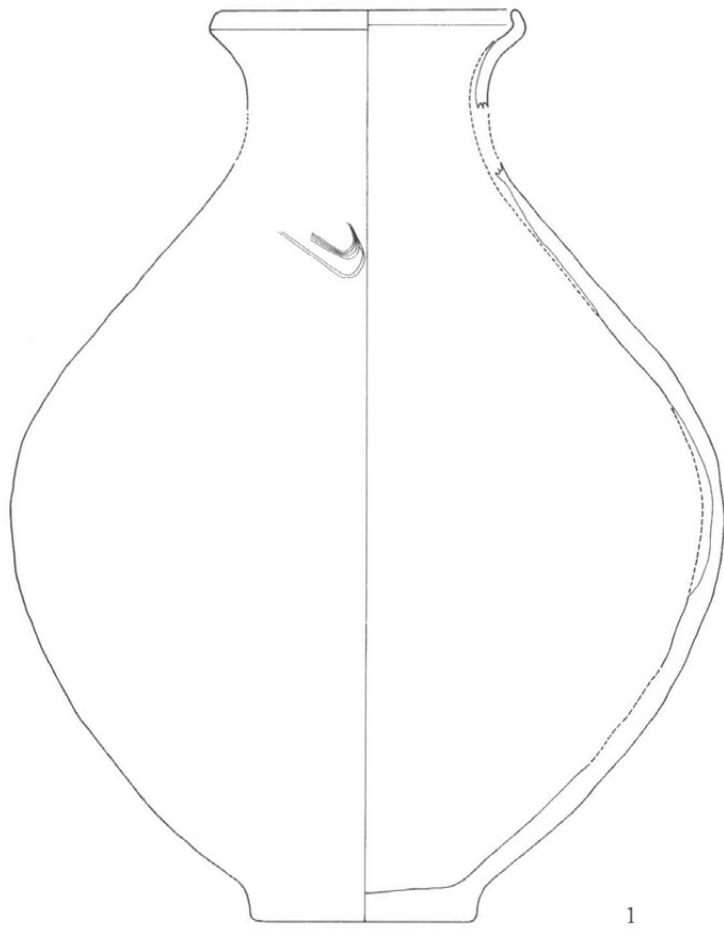
石器は、第11図1は有肩扇状形石器で同石器としては小型のものである。最大幅7.9cm、長さ4.5cm、厚さ1.2cm。重さ30g。硬砂岩製。同図2は横刃型石器である。最大幅10.1cm、長さ7.6cm、厚さ1.9cm。重さ208g。ホルンフェルス化している。同図3は敲打器である。最大幅12.7cm、長さ9.7cm、厚さ3.5cm。表面に擦痕がある。重さ650g。硬砂岩製。このほか、炉内より黒曜石片が出土している。

〔時期〕

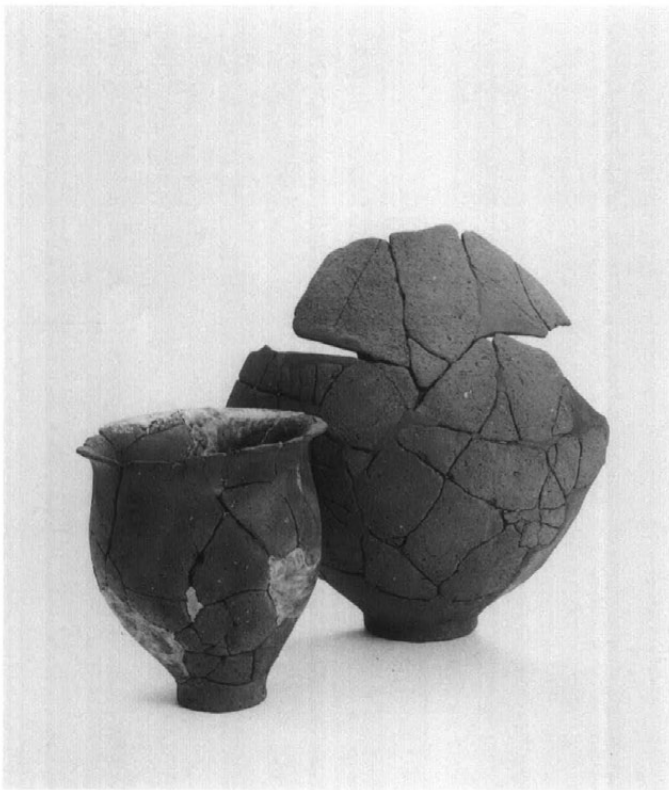
出土遺物から弥生時代後期(中島期)と考えられる。



第11図 SB03 出土石器



第12図 S B03 出土土器



甕出土状況

(2) 掘立柱建物址 (ST)

① ST01 (第13図)

[遺 構]

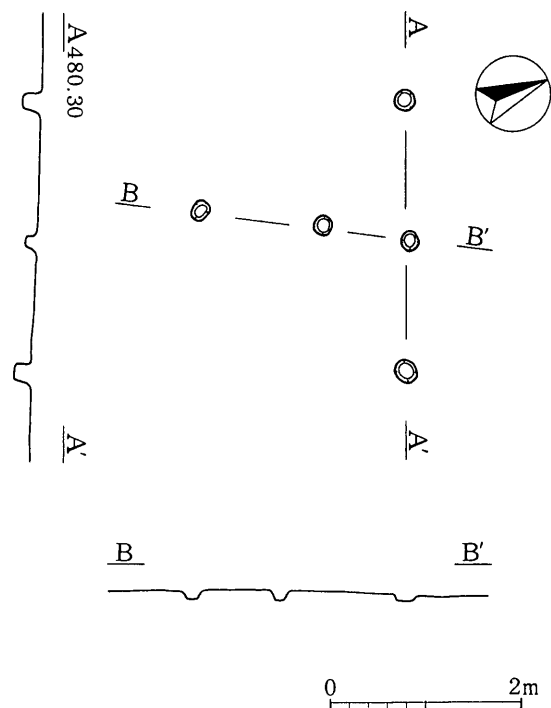
A Q06を中心に検出した。柱穴5個を確認したが、さらに調査区外にのびるとみられ、全体の規模は不明である。柱穴は径20cm前後の円形で、深さは検出面から10～20cmである。柱の心心距離は東西方向が1.35～1.45m、南北方向0.95～1.3mになる。柱穴のうち、浅いものは削平されている可能性もある。

[遺 物]

土器は小片がわずか出土したのみで、図化できるものはない。

[時 期]

出土遺物が少なく、時期を特定できない。



第13図 ST01

(3) その他の遺構 (ST)

① 柱列址1 (第14図)

[遺 構]

A I・A J12を中心に検出した。位置的には段丘の縁辺部にあたる。既存鉄塔のある調査区の南側であるため、鉄塔拡張部分で確認したのみである。直径12～30cmの小柱穴12個が不規則に並んでいる。

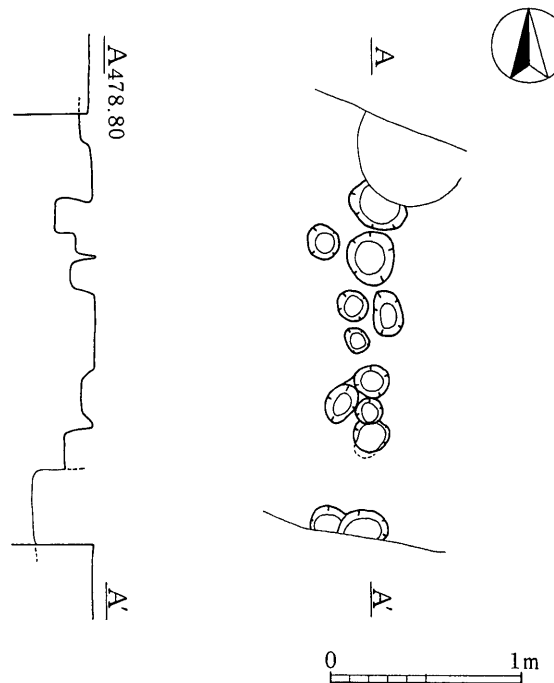
検出面からの深さは4～20cmである。全体の規模や性格は不明である。

[遺 物]

土器は小片がわずか出土したのみで、図化できるものはない。

[時 期]

出土遺物が少なく、時期や性格を特定できない。



第14図 柱列址1



ST01



柱列址 1

(4) 遺構外出土遺物

① 土器・石器 (第15図)

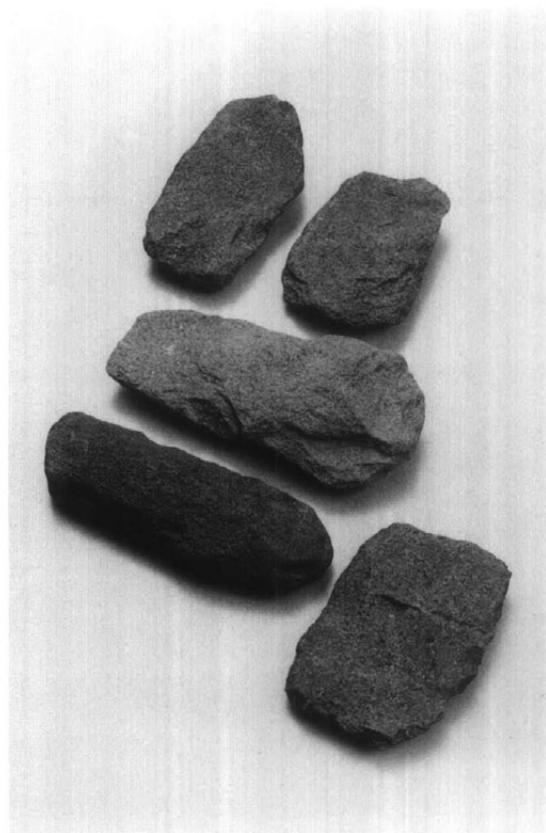
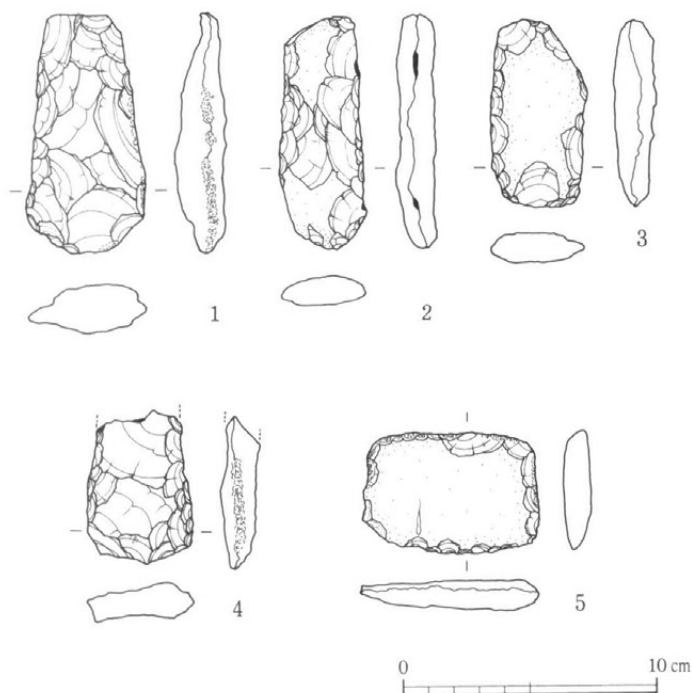
土器はいずれも小破片のため図化できるものはない。

石器は第15図1は打製石斧である。最大幅4.7cm、長さ9.4cm、厚さ2cm、重さ99g。硬砂岩製。なお、同石器はグリットで取り上げたが、出土位置からS B03に伴う可能性がある。同図2は打製石斧である。最大幅3.3cm、長さ9.2cm、厚さ1.5cm、重さ72g。緑泥岩製。同図3は打製石斧である。最大幅3.6cm、長さ7.3cm、厚さ1.7cm、重さ57g。硬砂岩製。同図4は打製石斧で上半部が欠損している。最大幅4.2cm、現存長6.1cm、厚さ1.5cm。硬砂岩製。同図5は打製石庖丁である。最大幅7cm、長さ4.8cm、厚さ1.2cm、重さ56g。硬砂岩製。

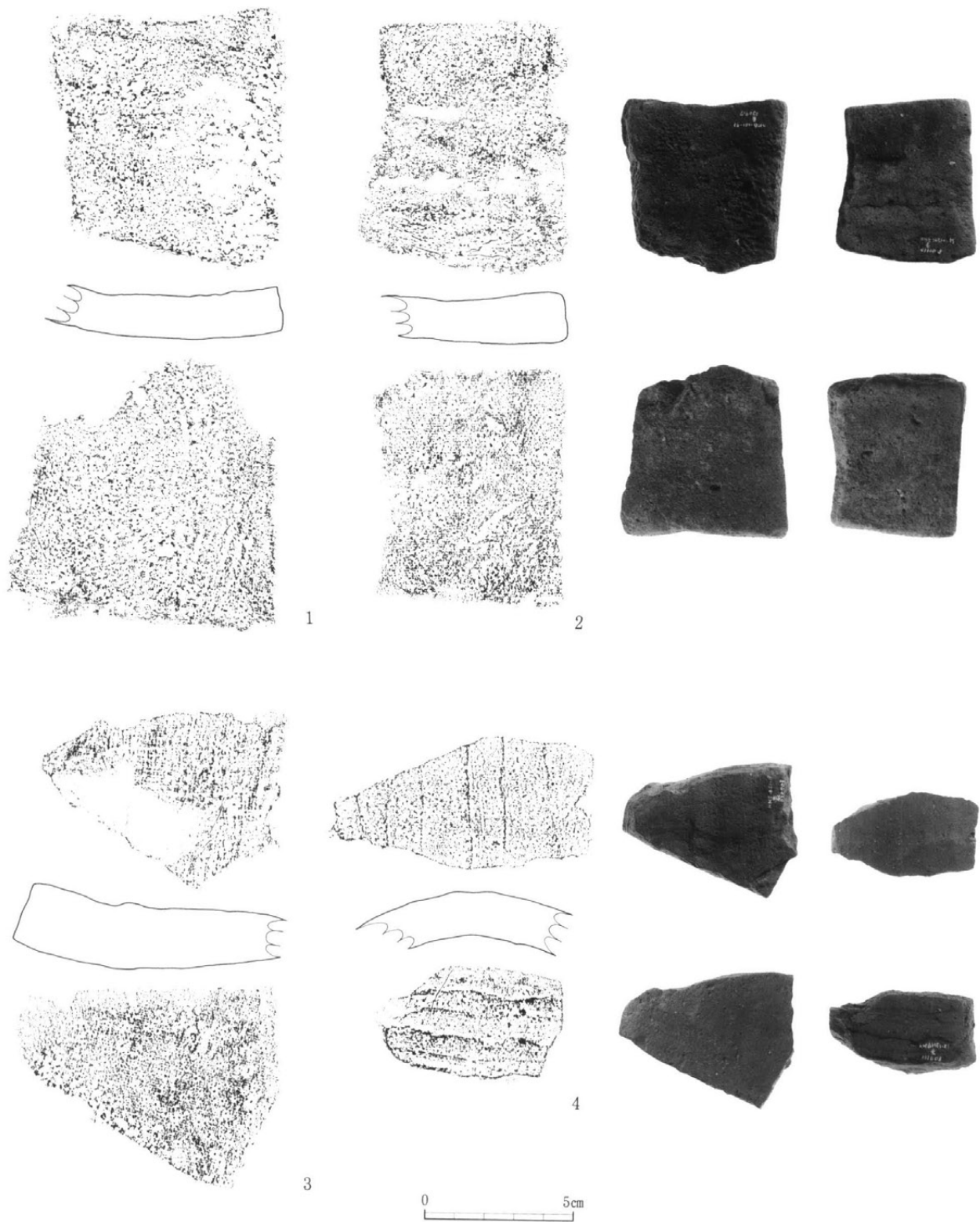
② 瓦 (第16図)

瓦はいずれも調査区外からの表採によるものである。表採地は調査区の西側の平坦部および東から南側にかけての斜面である。調査地西側一帯の平坦部での表採資料はいずれも小片であるため図化していないが、にぶい黄橙色もしくは橙色である。東から南側にかけての斜面では比較的大きな破片が表採できたが、平坦部の削平に伴い転落したものであろう。

第16図1は東側斜面表採の平瓦。にぶい黄橙色で表面は荒れているが、外側にタタキ痕があり、焼成は良好。同図2は南側斜面表採の平瓦。にぶい黄橙色土で表面は荒れているが、焼成は良好。同図3は南側斜面表採の平瓦。橙色で布目痕があり、焼成は良好。同図4は南側斜面表採の丸瓦。灰色で外面はヘラナデ調整、内側はユビナデ調整で、焼成は良好。



第15図 遺構外出土石器



第16図 遺構外出土瓦

第Ⅳ章 ま と め

1. 前林遺跡の弥生時代集落について

今回の調査で確認された弥生時代後期の竪穴住居址は3軒であるが、そのうちS B02は調査範囲がわずかであり、全体を確認することはできなかった。S B01・03は、規模に大小があるが、主軸方向はほぼ等しいことから、比較的大きな住居を中心に、やや小型の住居数軒で構成される集落との見方もできるが、両者の間が1 m程度と近いことから同時に存在したものではないとみられる。とはいえ、両者の存続時期は極めて近いことが想定できる。集落としての広がりについては、これまでに石器が表採されているものの遺構としては知られておらず、段丘平坦部にどの程度広がるかは現時点では不明である。

当地方の遺跡立地は、大きくは南北にのびる比高差30m以上の段丘崖を境に分けられる。上位の段丘は西から東に流れる小河川によってさらにいくつかに分断され、各段丘上の集落それぞれが、基本的には一つの単位を構成すると考えられる。前林遺跡もこうした段丘上に立地する。当地方の弥生時代後期の集落は、天竜川の氾濫源や広い湿地に面した下位段丘上の集落と、比高差30m以上ある上位段丘上に立地する集落が存在する。前者は水田耕作を中心とし比較的大きな集落を形成するものがあるのに対し、後者の多くは畑作と谷地を利用した水田耕作との複合的農業を営み、土地生産力の低下により短期間で移動する集落であるとされている。前林遺跡のある段丘も小河川ないし湧水に挟まれていることから、生業との関係でいうならば、集落を突端部に配し、限られた平坦面を最大限に利用した畑作と段丘崖下の湿地・谷地を利用した水田耕作との複合的農業を営むという集落構成が想定できる。とすると、住居址の重複がないことからみても、2世代程度にわたって居住し、家財の多くを持って移動した短期的集落との見方が可能である。

ところで、今回調査をしたS B01では前章でも述べたとおり、貼床の下で確認された小穴から管玉10個が出土した。本址と重複する住居址を含めた他遺構はなく、小穴が単独で存在したと考えない限り、住居址のいわゆる“床下”に埋納された可能性が考えられる。本址は遺物の出土量こそ少ないが、炉址とみられる施設が3箇所があり、そのうち炉址1は部分的に上部を貼床で覆われていた痕跡が認められることから、平面プランからは建替え等が行われた状況は確認できないものの、長期的な使用あるいは特殊な使用がなされた可能性も考えられる。住居址内外からは鉄器や石材剥片等は出土しておらず、玉造り的な性格は考えられない。管玉の石材は流紋岩系とみられるが、近隣に今回出土したものと同様の石材が存在しない可能性もあることから、今後管玉の詳細な成分分析をし、産地同定することで新たな知見が得られるものといえる。

本遺跡の場合、地形からみても集落域は決して広いものではない。生産域を段丘崖下の離れた地に求めるとしても、短期間の集落であった可能性は高い。下位段丘に展開する同時期の集落としては、小池遺跡や安宅遺跡等があるが、いずれも調査範囲が限られていることから、実態は把握できていない。

安藤氏は、弥生時代の集落遺跡研究の問題点を指摘(参考文献2)する中で、「生業以外の諸行為が集落立地の規定要因になることもあったはずである。(略) 集落や集落群を取り巻く物資の流通状況やそのルート、内外で生じる緊張関係なども含めた、多様な側面を加味した解釈が必要になってくるはずで

ある。」と述べ、伊那谷の上位段丘上の遺跡についてもその存在意義について再考を求めている。

ここでは答えは出せないが、段丘上の短期集落の動向をみると、弥生時代後期の社会情勢を反映するものとして、人口の増大による上位段丘への進出だけでは把握できないものがあると考えられる。さらに、こうした短期集落と墓域の関係も当時の墓制のあり方を含めて検討が必要であろう。

参考文献

1. 山下誠一 2000 「飯田盆地における弥生集落の動向」飯田市美術博物館研究紀要 第10号
2. 安藤広道 2003 「弥生時代集落遺跡研究の問題点」平成15年度 関東甲信越静地区埋蔵文化財担当職員共同研修協議会 研修資料

2. 前林廃寺跡について

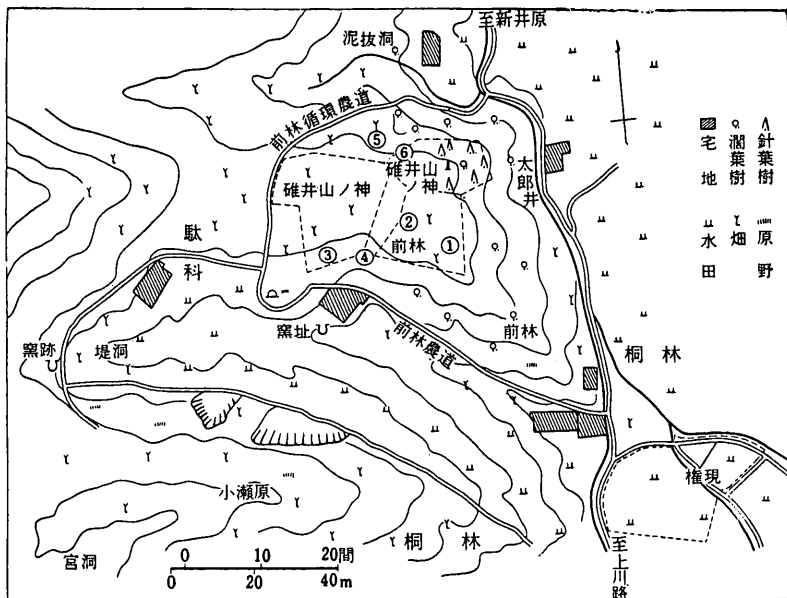
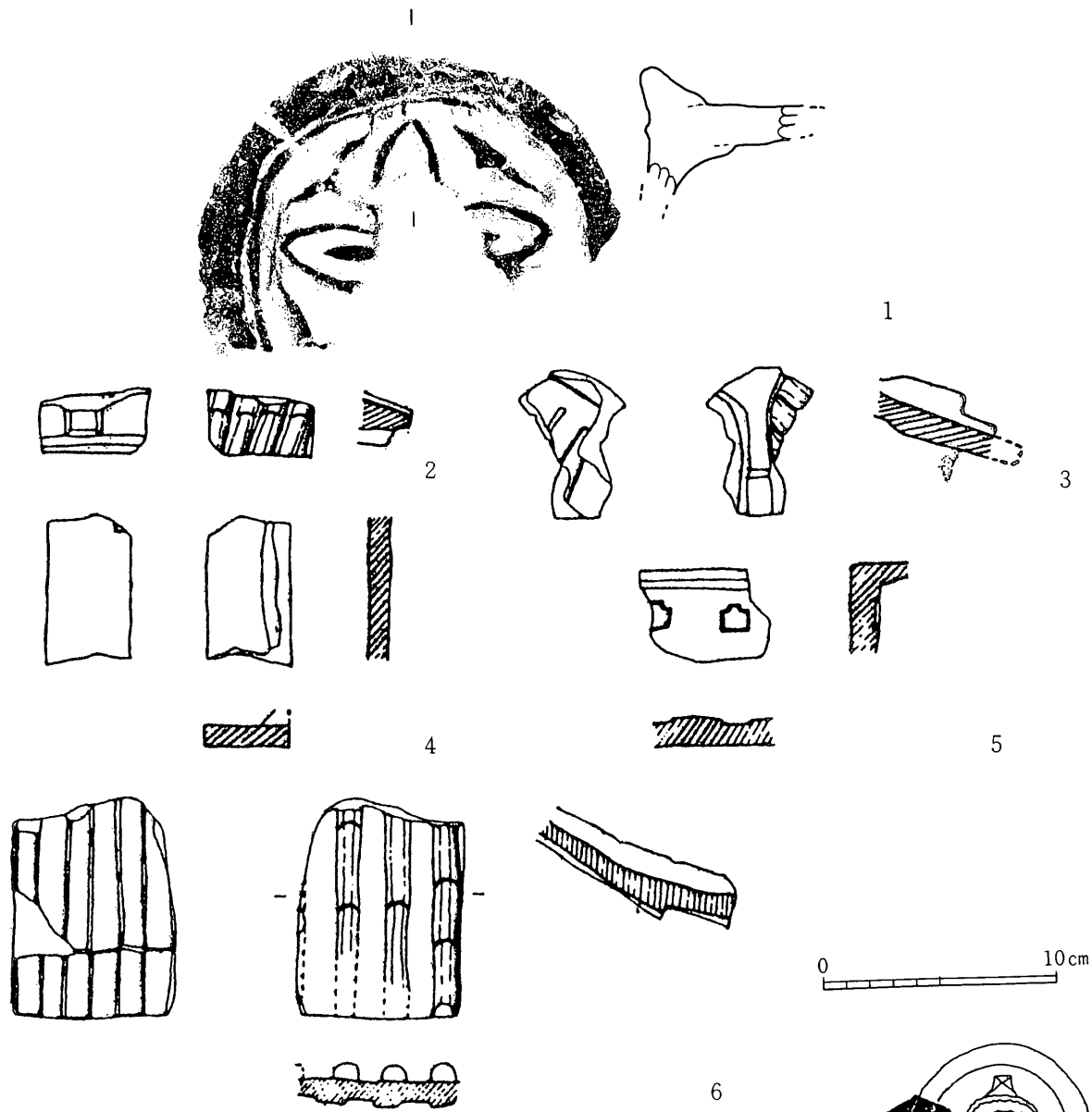
今回の調査では、遺構として寺院跡の確認はできなかった。これまでも、この一帯では今回調査地点から西へ150m離れたところで鉄塔建設工事に先立つ調査を行っているが、やはり寺院の痕跡は確認できていない。以前から知られている瓦の出土が段丘の平坦部中央に集中することからして、前回と今回の調査地点の間に中心伽藍が存在するものとみられる。

今回の調査でも、瓦は若干ではあるが調査区内の段丘突端部から出土している。さらに、調査区外の西側平坦部から小破片を採集したほか、マレットゴルフ場となっている東から南にかけての傾斜面から平瓦・丸瓦の破片を採集した(第16図)。傾斜面からのものは、工事や耕作等により上の平坦部から転落したものとみられる。瓦の出土から、寺の伽藍は平坦部を中心とするが、寺域そのものは今回の調査地点も含めた段丘突端部まで広がっていた可能性があり、今後の調査でその点を考慮する必要がある。ただし、今回の調査地点でも確認されたように、突端部は他に比べると土砂の流出が多い。今回の調査した住居址も崖に面した東側が特に削平が著しく、表土(耕土)直下がロームとなる。ローム自体も削平されている可能性があり、そのため遺構の掘り込みが地山のロームに深く達していない場合は、遺構確認できない可能性がある。

前林廃寺跡については、これまでに表採された遺物から奈良時代の寺院と推定されているほかは、実態は不明であるが、ここではそれらの概略を述べておきたい。第17図には前林で表採された遺物のうち主なものを載せた。1は竜丘小学校蔵の軒丸瓦で、単弁四葉蓮華文軒丸瓦で地方色豊かなものであるという(参考文献9)。このほかにも軒丸瓦片が1点ある。2～6は瓦塔片、7は須恵質板に三尊仏を線刻したもので、瓦塔の瓦筒部分の線刻と推定される(参考文献9)。こうした遺物のほかにも布目瓦片多数、鉄鉢形須恵器・緑釉香炉蓋・銅鏡片等が表採されている。かつて確認された瓦の出土地点については、第17図の地図によると①～②に多く、ここが寺院の中心部であったと考えられるという。また、④(⑤⑥)も多く、これらは開墾時に寄せ集められたものであるという(参考文献2)。

瓦の出土は知られるが、これまでに礎石とみられる石の配列は確認されていない。瓦の散布状況や今回の調査地点でもわかるとおり、表土の堆積は厚くなく、礎石があるとすれば耕作時に発見される可能性は高い。もともと存在しなかったのか、古くから農地として利用されていたことから、開墾時に取り除かれた可能性もある。

さらに、周辺状況をみると前林廃寺跡のある段丘と南側の古瀬原の間には深く入り込んだ谷があり、



第26図 前林附近古瓦出土地（飯田市駄科・桐林）

①～⑥古瓦の多く出土する所。原図 塩沢正人 作図 宮下操



0 5cm

（2～6 - 参考文献7、7 - 参考文献9、
地図は参考文献2による）

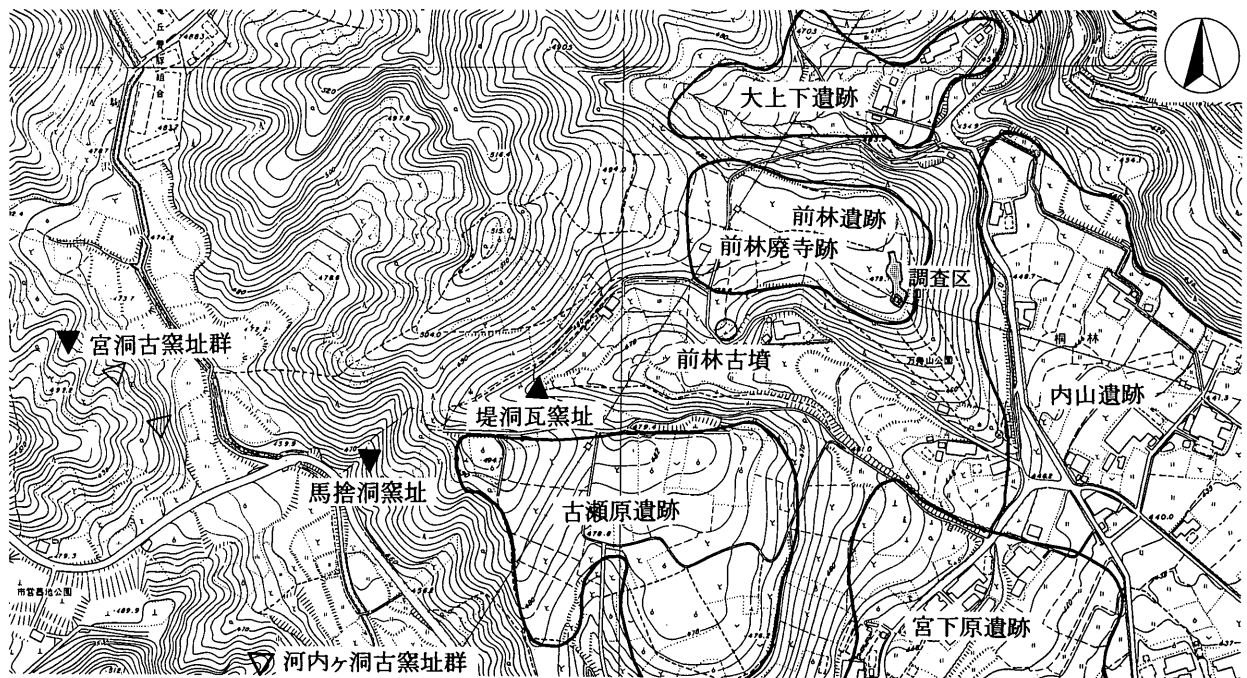
第17図 前林廃寺跡関連資料

この谷の奥では古くから瓦片が多数みつき、堤洞瓦窯跡と名付けられている。須恵器と瓦を焼いた兼用窯とみられているが、調査例はなく、学校水道源建設に伴い破壊されたという。「堤洞に水の豊富なことは、現在水道の水源地である上に洞中の水田はすべて谷地の湧水を以って灌漑し、洞の出口には貯水地(堤)があったので堤洞の名が起った。」という。また、前林出土瓦と堤洞出土瓦を比較すると、前者は赤褐色が多いのに対し、後者は灰黒色であることから、前林の瓦の大部分はほかの窯で作られたと考えられるという(参考文献1)。このほかに、段丘の南側、堤洞に面した斜面にも窯跡があるというが、現在人家が建っており詳細は不明である。

竜丘地区には、御猿堂古墳や馬背塚古墳などの当地方を代表する前方後円墳があるが、こうした前方後円墳の築造が衰退し、これにかわって寺院が建立されるという歴史的・社会的転換期の様相を上川路廃寺(現 開善寺付近)や前林廃寺の存在から見て取ることができる。また、須恵器や瓦を焼いた生産遺跡も周辺に集中していることから、新たな技術の導入による在地生産体制の実態を解明することも、地方における律令国家への移行を考える上で重要である。

前林廃寺跡関連参考文献

1. 市村成人編 1955『下伊那史』第三巻
2. 市村成人編 1961『下伊那史』第四巻
3. 大澤和夫 1961「前林発見の瓦塔について」伊那 7月号
4. 遮那真周 1972「飯田市前林地籍の考古資料」伊那 3月号
5. 遮那藤麻呂 1982「下伊那地方の古瓦出土遺跡」長野県考古学会誌44
6. 遮那真周・藤麻呂 1984「伊那谷南部における初期仏教文化とその歴史的背景」長野県考古学会誌49
7. 林和男 1985「信濃の瓦塔」信濃 4月号
8. 遮那真周・藤麻呂 1985「飯田市前林出土の別種瓦塔」伊那 3月号
9. 岡田正彦 2004「考古学からみた飯伊地方の古代仏教文化」飯田市美術博物館研究紀要 第14号



第18図 前林廃寺跡周辺 0 300m

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえばやしいせき（まえばやしはいじあと）							
書 名	前林遺跡（前林廃寺跡）							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	澁谷恵美子 佐々木嘉和							
編集機関	飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel 0265-22-4511							
発行年月日	西暦2005年 2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
まえばやしいせき 前林遺跡	いいだし 飯田市	20205		35°	137°	平成15年	243.14 m ²	鉄塔建替 工事
まえばやしはいじあと 前林廃寺跡	きりばやし 桐林 1461-21他			28′	49′	9月2日～		
				24″	27″	10月10日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前林遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居址	弥生土器 石器・管玉				
前林廃寺跡	寺院	奈良時代	なし	布目瓦				

前林遺跡

(付 前林廃寺跡)

2005年2月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印刷 株式会社 秀文社
